

九州大学 経済学部 同窓会報

第62号

九州大学経済学部同窓会
事務局 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01750-6-21743

目次

平成29・30年度行事予定(総会のご案内) / 1

研究院長就任としての挨拶 磯谷 明德 / 2

事務局長挨拶 藤井 美男 / 3

支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 4

理事 中村 龍太(平成24年卒) / 4

自分を見つめ直す場所 上妻 諒子(平成6年卒) / 5

関西支部 副支部長 中野 光男(昭和50年卒) / 6

事務局長 谷村 信彦(平成3年卒) / 6

同窓会理事 中野 善文(昭和51年卒) / 8

福岡支部 副支部長兼事務局長 高木 直人(昭和57年卒) / 11

九州大学アカデミックフェスティバル2016探訪記

嶋田 正明(昭和54年卒) / 11

企業入社後の心構えと人脈作り

右田 喜章(昭和42年卒) / 12

交流ゴルフ会、第61回コンペを開催!

木村 博(昭和58年卒) / 13

平成28年忘年会を開催

岡本 洋幸(平成22年QBS修了) / 14

大分県支部 事務局長 工藤 順一(昭和55年卒) / 15

同窓生健筆模様

秀村ゼミ始まりの頃 田中 貞輝(昭和32年卒) / 16

『生産的労働概念の再検討』

安田 均(昭和59年卒・平成21年博士入) / 17

リレー随想

九大にて 大屋 祐雪(昭和26年卒) / 19

全身全霊でチャレンジ 清水 逸雄(昭和29年卒) / 22

九州歴史考 森本 廣(昭和46年卒) / 24

片山先生とゼミの思い出 中山 悦治(昭和50年卒) / 25

時を超えた不思議な縁 工藤 順一(昭和55年卒) / 26

人物往来～退任

カリキュラム改革と博士学位審査制度改革

久野 国夫(昭和52年博士入) / 28

九州経済と立地企業に関する学習 山本 健兒 / 29

同窓会会則 / 30

同窓会歴代会長 / 32

同窓会費納入のお願い / 32

平成29、30年度行事予定(総会のご案内)

平成29、30年度の各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

平成29年度 福岡支部総会

日時 平成29年6月9日(金) 18時～

場所 ソラリア西鉄ホテル 8F

(福岡市中央区天神2-2-43 TEL(092)752-5555)

<お問い合わせ先> 福岡支部事務局 高木・国生

公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721-4900

E-mail soumu-02@kerc.or.jp

平成29年度 全国・東京支部合同総会

日時 平成29年7月7日(金) 18時～20時50分

場所 学士会館 210号室

(東京都千代田区神田錦町3-28 TEL(03)3292-5936)

<お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行

株式会社オリエン特総合研究所

TEL (03) 5877-5590 FAX (03) 5877-5859

E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)

t29yoshimoto@aol.com(自宅)

平成29年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成29年11月開催予定

場所 未定

平成30年度 関西支部総会

日時 平成30年5月19日(土) 15時～

場所 ハートンホテル北梅田

(大阪市北区豊崎3-12-10 TEL(06)6377-0810)

<お問い合わせ先> 関西支部事務局 中野 光男

富士精版印刷株式会社管理本部 気付

TEL(06)6394-1182

E-mail m-nakano@fujiseihan.co.jp

研究院長としての挨拶



経済学研究院長
磯谷 明德氏

2015年4月から、経済学研究院・学府・学部の運営の舵取りを仰せつかり、2年が経ちました。2015年度は、国立大学法人における第二期中期目標・中期計画期間の最終

年度にあたり、第二期を総括・評価する「教育研究評価に係る実績報告書」の作成に1年のほとんどを費やすということになりました。評価担当の岩田副研究院長に陣頭指揮をとってもらい、そして4部門長と教務委員会委員長の古川教授、ビジネススクール教務担当の永田教授の尽力によって報告書の提出を終えることができました。そして2016年度には、2021年度までの6年間にわたる第三期中期目標・中期計画の期間が再び始まりました。この第三期期間中の大きなイベントは、やはり2018年度半ばの伊都キャンパスへの移転ということになろうかと思えます。このキャンパス移転は、第三期の始まりとともに開始された国立大学の機能強化の方向性に応じた予算の重点配分の仕組みの下、九州大学全体の基幹経費が毎年4.6億円減額される中で行われるだけに、移転の最終組である経済学研究院にとっても大きな財政上の負担となり、部局運営にマイナスの影響が出ることは必定です。とはいえ、学部・学府での教育研究の水準を決して落とすことなく、移転までの期間を乗り切る方策を、事務方の協力も得ながら教員全員で考えねばならないと思っています。

さて、こうした財政的な状況に加えて、本研究院・学府・学部の現状ですが、大学全体では、2018年の移転完了までの期間を目安にして、各種の改革が急ピッチで進められています。大学本部は、2015年10月に「九州大学アクションプラン2015-2020」を公表し、文系部局に対しては「大学の使命や18歳人口減少社会到来を踏まえた人文社会科学分野等の再編成・機能強化」を求めています。これに呼応し

て、総長諮問機関としての「人文・社会科学分野における教育研究組織における将来構想に係る検討WG（第一次）（第二次）」が2015年6月に設置され、2016年2月からの第二次WGでは、同年の3月から5月にかけて、計6回にわたる本研究院と外部有識者との意見交換会が行われました。そのうちの3回は九大東京同窓会、九州大学学び舎との意見交換でした。この意見交換会においては参加いただいた卒業生の皆様に、数々の厳しい意見とともに多くの有益な助言をいただきました。同窓生の皆様には、改めてお礼を申し上げたいと思います。

この第二次WGの議論の中で共通に認識されるようになったのは、前研究院長の山本先生の時から構想してきた「学部・学府一体となった教育研究の国際化・グローバル化の推進・強化」の下、それを具体化する魅力ある教育プログラムを構築・提供し、それを実効あるものにするということです。

もちろん経済学研究院における教育研究の国際化・グローバル化の取組みは、今に始まったことではありません。2009年には、中国人民大学経済学研究院との間での大学院修士課程におけるダブルディグリープログラム（双方の学位取得が可能な制度）が開始され、人民大学側から毎年10月に最大で5名の学生が経済学府に入学します。また2010年には、経済学府経済工学専攻にG30経済学国際コースが開設され、英語によってのみ修士と博士の学位が取得できるコースが整えられ、大学院における留学生教育が質・量ともに拡充されることになりました。中国人民大学とのダブルディグリープログラムと経済工学専攻のG30経済学国際コースは、2018年と2019年とに、それぞれが開始から10年目という節目の年を迎えます。

そこで、とりわけ昨年の2016年からは、これまで本研究院で進めてきた教育研究の国際化・グローバル化の更なる加速の期間と位置づけ、そのための様々な準備をしてきました。今後開始される学部・学府における新たな教育プログラムは、以下の通りです。

・学士課程国際コース「グローバル・ディプロマプログラム (GProE)」：新学部「共創学部」の開設と

ともに、経済学部には2018年4月に開設。学部2年次生から履修が始まる経済学分野の高い専門性を備えたグローバル人材育成プログラムをその内容としています。その準備のために、海外の大学との連携強化を進める第一歩として、国立台湾大学社会科学研究所との部局間交流協定を2016年1月に締結し、すでに相互の学生交換が始まっています。さらに、このGProE履修生の短期語学研修先の候補機関として、オーストラリアのICTE-UQ（クィーンズランド大学）に絞り込み、その交渉と派遣のための制度設計の整備が2017年度の大きな課題となります。

・学府「グローバル・ビジネスサイエンス・プログラム（GBSP）」：学府における英語による包括的なビジネスサイエンス教育の実施（「2016年度大学改革活性化制度」に採択された取組）。この新しい学府教育プログラムは、学部GProEにおいてグローバル人材としての基礎固めをした学部生の大学院での受け皿となるとともに、海外からのインバウンド需要を取り込むことを意図したものであり、学府の3専攻を横断する形でカリキュラムの編成がなされます。2017年10月から経済工学専攻において先行実施され、2018年10月からは経済システム専攻において

も開始されます。

・文系4学部における「学部横断型・専門領域型副専攻プログラム」：これは文系4学部において、4学部特定のテーマでの横串を入れる形の「横断型」と、自学部以外の専門領域を深く学ぶ「専門領域型」という2つの副専攻プログラムを設置し、文系学部に所属するすべての学部学生に開放するというもの（「2017年度大学活性化制度」に採択された取組）です。経済学部においては、「グローバル時代のビジネス」という横断型プログラムと「経済学・経営学のツールで解く現代社会の諸課題」という専門領域型プログラムの2つを開設します。この学部教育プログラムは、2018年4月から開始され、そのための準備が、2017年度中になされることとなります。

以上の学部・学府での新しい教育プログラムのいずれも、伊都キャンパスへの移転が完了する2018年度から本格的に動き出すこととなります。同窓生の皆様には、そのスタートアップを温かく見守っていただくとともに、時には厳しいお言葉も賜りますればと存じます。2017年度においても、皆様のご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。

平成29(2017)年度入学式 新入生326名 平成28(2016)年度卒業式 卒業生310名



同窓会事務局長
藤井 美男氏

平成29年4月5日(水)、伊都キャンパスの椎木講堂で平成29(2017)年度入学式が行われた後、4月7日(金)に箱崎キャンパス大講義室にて経済学部オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻（九大ビジネススクール、略称QBS）の入学式は、4月8日(土)に、箱崎キャンパスの中央図書館視

聴覚ホールで開催されました。入学者総数は326名で、内訳は経済学部経済・経営学科152名、経済工学科94名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻37名、産業マネジメント専攻43名です。経済学部オリエンテーションでは、貫正義同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

3月24日(金)には、福岡リーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は225名で、うち経済・経営学科145名、経済工学科80名です。経済学府修士課程修了生は85名で、うち経済工学専攻18名、経済システム専攻25名、産業マネジメント

専攻42名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も、磯谷明德研究院長により行われました。以下が平成28年度の授与者です。

修士論文・プロジェクト論文

- | | |
|----------------|-------|
| (1) 経済工学専攻 | 羅 コウイ |
| (2) 経済システム専攻 | 菊池 美幸 |
| | 田中 大智 |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 青木 浩樹 |
| | 桐生 泰伸 |

成績優秀者

- | | |
|-------------|-------|
| (1) 経済・経営学科 | 清水 識貴 |
| | 下川 和人 |
| (2) 経済工学科 | 安部麻衣子 |

本年度も各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力を仰ぎ、一年間の活動と行事をつつがなく終えることができました。関係の皆様方には心より御礼申し上げます。2018(平成30)年9月に箱崎から伊都キャンパスへ移転、同10月から後期授業開始という日程が目前となって参りました。全学の卒業式が伊

都キャンパスの椎木講堂で行われ、箱崎キャンパスへ移動して個別の学位記授与そして卒業祝賀会という一連の日程も来年3月が最後となります。移転後に卒業祝賀会をどのように開催するか、というのが私ども事務局の課題で、学内理事を中心にこれから検討していくこととなります。

昨年理事会等で御意見を頂き、各支部の御協力も得て『同窓会報』の編集体制と方針がかなり拡充されてきました。『同窓会報』をより読み易く興味深いものにすることで、会費納入率向上の一助となることを期待しております。同様に、「九州大学同窓会連合会」から経済学部同窓会の名簿データ提供依頼という、昨年来の課題もごぞいます。この件は今年中に成案を得て、総会で御了承を頂けるよう準備中です。

今後も貫正義会長を先頭に、同窓会活動の更なる充実を図って参りますので、各支部同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ一層の御協力をお願い申し上げ、新年度の御挨拶といたします。

※学内理事会からのお知らせ

山本健児理事（前研究院長）の定年退職に伴い、鷲崎俊太郎准教授が新たに学内理事として加わることになりました。

支部だより

東京支部

(1) 東京支部総会・懇親会

毎年7月7日の七夕の日に開催する経済学部同窓会東京支部の総会&懇親会が平成28年度も学生会館



記念講演 古川治次氏



で開催されました。総会では、活動報告や決算が了承された後、次年度予算案と役員選任案が承認されました。

引き続き開催された記念講演は、法学部昭和37年卒、元三菱商事副社長の古川治次様に「学び続ける楽しさ、素晴らしさ～決算書の謎解きも趣味」と題して講演をいただきました。三菱商事において長く経理部門に在籍されたご経験をもとに、役員として勤められた三菱商事、日本郵政、鹿島建設の3社の決算書を題材に、分析・比較をしていただきました。また、趣味の俳句に関連する話題もお話いただきました。

その後の懇親会では、来賓の経済学研究院長の磯谷教授をはじめ、経済学部の先生方、名誉教授、法学部東京同窓会古川会長、他支部の代表など80人弱の参加者で年に一度の交流を楽しみました。近所の喜山倶楽部で開催した二次会では、業務で遅くなった卒業生も合流して、さらに交流が進みました。

(2) 東京同窓会・サマーフェスタ

毎年8月の最終土曜日に開催される東京同窓会サマーフェスタには、経済学部同窓会東京支部も積極的に参加しています。九大東京同窓会（会長：初井経済学部支部長）では、若手の理事を中心に、数か月前から、参加者に楽しんでもらえるような企画を練って、その内容をアピールすることで毎年300名を超える参加者を集めています。今年は、浴衣を着て、炭坑節を踊ったり、ミセスインターナショナル日本代表の山口真紀さん（工学部）の披露や歌手の深水郁さん（文学部）の歌唱など、盛りだくさんでした。

関東地区に居住、又は勤務する九大卒業生にとって、久しぶりに再会する、新たな交流の契機となる年に一度の学部を超えた交流の場になっています。

【東京支部事務局長 吉元 利行 1978(昭和53)年卒】

(3) 鷺崎ゼミ&九州大学OB・OG会

こんにちは、経済学部同窓会理事、12年卒の中村です。先日、12月10日（土）赤坂にて、鷺崎ゼミナールの学生を交えたOBOG会が開催されました。師走らしい厳しい寒さにも関わらず、総計28名の参加となりました。幅広い年代の卒業生の方々が参加されており、普段の仕事の中では気がつかない視点や発見があり、同窓会の醍醐味を感じることができました。また、現役の学生さんと話していると、急速に変化し過去の常識が必ずしも通用しない現代だからこそ、これからの世の中や自分の人生のことを危機感と夢を持って真剣に考えているな、という印象を強く受けました。私も学生の時の自分を思い出して



気持ちを新たに頑張っていこうと思います。個人的には出身ゼミであり、かつては弱小ゼミだった鷺崎ゼミナールが、既に8年間も続いているという事実は感慨深いものでした。来年もぜひやりましょう！

【理事 中村 龍太 2012(平成24)年卒】

(4) 新卒歓迎会に向けて

毎年、4月の第二土曜日に開催している経済学部の新卒者歓迎会は、竹之下、西原、嶋田理事などの若手理事で企画を検討開始し、今年は、4月8日（土）15時から開催することになり、早速、卒業祝賀会にアピールに行く担当などを決めました。ここ数年、新卒歓迎会で歓迎を受けた卒業生を中心に、先輩として今春卒業の後輩たちに、東京での住み方、働き方、文化の違いなどを、自分たちの経験をもとに話したり、悩みを聞いたりする場としたいと考えています。

(5) 若手の活動から

前回の青柳さんに続く女性執筆者、鷺崎ゼミ出身の上妻諒子さんに同窓会とのかかわりについて書いてもらいました。

.....

自分を見つめ直す場所

株式会社 商船三井

上妻 諒子氏

2015(平成27)年卒

この度はこのような貴重な機会を頂き、誠にありがとうございます。私と同窓会の繋がりは、新社会人として東京生活を始めた昨年、新卒歓迎会に参加したことから始まりました。新しい環境に戸惑っていた当初、同じ九大経済から飛び立ち、活躍されている先輩方とお話したことで、不安を吹き飛ばすことができました。また久しぶりの博多弁、箱崎キャンパストークで盛り上がった会は、心落ち着く場所でもありました。



同窓会は様々な業界・業種の方と関わりを持てる場でもあります。意識的に行動しない限り、社外の人と関わるのが少ない日々。異なる環境で働いている方とお話すると、仕事に対するスタンスや物事の捉え方など、思った以上に自分が組織の価値観に染まっていることに気づかされます。社会の広さ・多様性を思い出させてくれる同窓会は、自分を客観的に見つめ直す場所でもあります。

話を換え仕事に関してですが、私は現在中国企業をパートナーに仕事をしています。この1年で痛烈に感じたのは「チャイナリスクの存在」でした。学生時代、授業でチャイナリスクという言葉が度々耳にしましたが、当時の私にとっては机上の空論でした。また香港に留学したため、中国出身の友人も多く、中国はそんなに悪い国ではないとも思っていました。しかし今仕事で中国と関わって初めて、ビジ

ネスでは一筋縄ではいかぬ国だったと体感しています。政府の影響、国営企業特有の意思決定、商習慣、文化的要素、あらゆる面で「日本的ものさし」では測れない彼らの「常識」を学びました。ただその違いをリスクという言葉で片づけて良いのか、違いを乗り越えうまく付き合っていくには何が必要なのか、摸索する毎日です。ぜひ同窓会の先輩方のご意見、ご経験を伺ってみたいです。

今後も皆さまとの交流を大切にしながら、まず自分が一人前の社会人となり、そして同窓会が多くの方にとって意義ある場所になるよう、活動して参ります。

関西支部

「秋の勉強会」の報告

関西支部恒例の秋の行事「勉強会」が、11月12日（土）午後2時より、阪急32番街27階の中華料理店「グランド白楽天」にて行われました。今回の講師は、昭和29年経済学部卒の清水逸雄氏（元大日本製薬(株)常務取締役）、演題は、「元気で長生きするために」でした。聴講者24名は、清水先輩の激動の人生経験に基づいた崇高な理念に聞き入り、あっという間の1時間でした。ちなみに、清水先輩は旧制福岡高校理科の卒業生です。



はじめに、大日本製薬勤務時代。福岡支店に配属されたが、社長室へ異動、管理本部長として2代の社長に仕えたこと。思い出深いのは、サリドマイド事件の対応に追われた40代。サリドマイド事件とは、睡眠・鎮静剤サリドマイド（化合物名：N-フタルル・グルタミン酸イミド）を妊婦が服用することによって、胎児に四肢短縮などの障害（奇形）が生じた世界的な薬害事件（1960年前後）のことです。詳細な対応内容は説明されませんでした。マスコミの矢面に立ち、想像を絶する苦難な時期を長きにわたり過ごされたのだと思います。しかし、清水先輩は貴重な体験をしたとおっしゃっています。

次に、66歳で大日本製薬を退職した後、友



秋の勉強会 講師 清水 逸雄氏

人が事業運営の資金に困り、自分の全財産をなげうってその友人を援助したが、事業は成功せず裸一貫になってしまったこと。そして、友人への援助の状況を見ていたある方が、自分の研究していた天然物の研究成果を清水先輩に譲渡して、今後の成功を託されたこと。現在はその方の遺志を受け継いで研究され、近年大きな成果が出てきていること。口内衛生、放射線治療の白血球減少抑制、細胞活性化、抗酸化作用、皮膚疾患、掻痒症など。歯磨き製造業等においても、今後大きな商機があるのではと考えておられます。これらの活動も、みんなが元気で長生きするために協力できればと考えておられるからです。

サリドマイド事件、友人への経営支援、地道な天然物研究など、清水先輩の人生は「人のために命を懸けてやる」、「友達を救えたら幸せだ」という人のために最善を尽くす人生です。人の為に行動するときにはドーパミン、エンドロフィンが脳内発生・活性化し、究極的には病も忘れて人の為に尽くす、これが健康・長生きにつながると信じておられます。

勉強会終了の午後3時から、懇親会は小森田支部長（昭和46年卒）の「みなさんで清水先輩の開発した薬の効果を2月の支部総会で確認しましょう」との発声で乾杯をして始まり、お互いに旧交を温め話が弾む中、中締めは太田副支部長（昭和46年卒）の挨拶で、会場の都合で午後5時に終了しました。

「関西支部総会」の報告

第42回関西支部総会が、平成29年2月18日（土）午後3時より、阪急梅田駅に隣接する阪急ターミナルスクエア・17で開催されました。ご来賓の方も含め総勢約55名の参加を得て、盛大に行われました。

まず、第1部では、小森田支部長（昭和46年卒）の挨拶に続き、中野事務局長から平成28年度行事報



講演中の磯谷明德研究院長、その左が清丸事務局長代理

告、平成29年度行事計画・役員案の提示、並びに平成28年度収支報告がなされ、原案通り承認されました。役員改正は副支部長に中野光男氏（昭和50年卒）、事務局長に谷村信彦氏（平成3年卒）、監事に久保隆二氏（昭和49年卒）、新理事に平山浩一郎氏（平成8年卒）が選ばれそれぞれ就任しました。また、藤井同窓会事務局長より経済学部同窓会の近況についてご報告があり、続いて、秋の勉強会でご講演いただきました昭和29年卒の清水逸雄氏（元大日本製薬(株)常務取締役）より、勉強会の話の延長で、ご友人より引き継いで研究開発されている薬にまつわるお話をいただきました。

第2部以降は清丸事務局長代理（平成2年卒）の進行にて、講師の磯谷経済学研究院長より「中国经济研究の現在」という演題でご講演をいただきました。その中で、九大の留学生の中で中国からの留学生が増加していること、改革開放後の日本における中国（経済）研究が増加していること、中国经济が市場でもあり計画でもあるという中国经济の独自性（曖昧な制度）＝中国型資本主義であることなど、



「松原に」佐野先輩（右端）指揮で、杉（中央）鈴木（左端）先輩も声を揃えて



先輩と新人が握手



名誉教授・現教員の紹介

いろいろな研究者の本の紹介とともに、最新の中国経済研究について解説していただきました。

第3部の懇親会は、太田副支部長（昭和46年卒）の開会挨拶に続き、兒玉、福留、堀江名誉教授ほか大学、本部、福岡支部、東京支部、法学部のご来賓の方々の自己紹介が行われた後、磯谷経済学研究院長による乾杯で、懇談会が始まりました。今年も九州大学からお酒（九州大吟醸といも焼酎）を差し入れていただきましたが、しかし昨年とは打って変わって今年は現役の先生の声掛けにより、現役学生1名を含む20歳代の若手が10名、また女性も5名ほど参加していただき華やかな総会となりました。また、司会の発案で若手10名と大先輩が壇上に上がり大先輩から若手に握手の激励をいただくというセレモニーが行われました。（どちらが元気をもらったかはわかりませんが・・・）

午後4時30分から始まった懇親会もあっという間に予定の時間となり、いつもの学生歌になりましたが、今回は学生歌『松原に』を2度歌いました。1回目は、東京支部の杉哲男副支部長が持参された特別のCD（九大のホームページに本年2月初めにアップされたばかりのコールアカデミーのピアノ伴奏付き演奏。このCDは杉さんの主導により作られたもので、今後各学部の同窓会での活用が期待されます。）に合わせて、そして2回目はアンコールに代えて例年どおりのピアノ伴奏に合わせて高らかに斉唱しました。最後に、今回出席された同窓生の中で最高齢の清水逸雄先輩（昭和29年卒）が中締め挨拶に立ち、名残惜しまれながらも散会となりました。

ところで、関西支部では平成29年度の行事として、3月、9月のゴルフ会をはじめ、5月13日（土）の見学会（四天王寺界限）、11月11日（土）の勉強会（講師は昭和52年卒の遠藤雄二先生）などを計画してい

ます。同窓会の皆さん、ぜひ参加してみてください。参加を希望される方は、事務局まで遠慮なくご連絡下さい、お待ちしております。

なお、関西支部の総会は来年から5月開催といたします。平成30年5月19日（土）午後3時より、「ハートンホテル北梅田」にて予定しています。

〈関西支部事務局〉

〒532-0004 大阪市淀川区西宮原2-4-33

富士精版印刷株式会社 管理本部 気付

副支部長（前事務局長） 中野 光男（昭和50年卒）

事務局長 谷村 信彦（平成3年卒）

TEL：06-6394-1182 FAX：06-6394-1082

E-mail：m-nakano@fujiseihan.co.jp

.....

「大化の改新」の舞台は大阪の上町台地。新首都となったこの地で、政治改革が行われ、日本で初めての本格的宮殿である難波長柄豊碕宮が造営された。



関西支部 同窓会理事

中野 善文氏

1976（昭和51）年卒

前回の関西の歴史紹介は、大河ドラマで脚光を浴びた「真田丸」を取り上げたが、今回は、大阪城の南に隣接する「難波宮」を簡単にご紹介したい。ここは、大化の改新の時代と聖武天皇の時代の2回、日本の首都となったが、日本書紀に記載されているのにもかかわらず、所在地がわからなくなり、大阪市立大学を定年退職後の1954年から発掘を開始した山根徳太郎氏らが、周りの罵詈雑言に耐えながら、苦難の末、発掘8年目ようやく大極殿跡を発見した宮である。大阪の人たちからも、こんな立派な遺跡が、なぜ教科書に載ってなかったのかとよく質問される、まぼろしの宮である。今も発掘は続いており、新発見が相次いでいる。昨年12月にも、遺跡西側の、明治維新の「大村益次郎卿受難報国の碑」が建つ病院敷地内で、奈良時代（後期難波宮）の役所の遺構が発見され、現地説明会が開かれたばかりである。

さて、大化の改新であるが、645年、飛鳥板蓋宮において、中大兄皇子や中臣鎌足らが、蘇我本家の蘇我入鹿を殺害、続いてその父の蘇我蝦夷を死に至らしめ、政権を掌握するという事件が発生した。乙巳（いっし）の変である。日本書紀によると、その



直後、皇極天皇は、孝徳天皇に譲位し、(皇極天皇4年を大化元年とした)そして、冬12月9日、難波長柄豊碇(上町台地)に遷都。そして、翌大化2年1月1日、賀正の礼が終わって、大化改新の詔が発せられたのである。

そして、この上町台地に、650年から造営を開始した難波長柄豊碇宮(なにわながらとよさきのみや)が652年に完成。日本書紀には、「その宮殿の状、ことごとく論ふべからず」すなわち、難波長柄豊碇宮は、言葉で言えないほどの素晴らしい宮殿である、と書いている。

「難波長柄豊碇宮(前期難波宮と便宜上呼ばれている)」は、それまでにない大きな特徴を持っていた。主なものは

①天皇の住まいである「内裏」、後の大極殿に匹敵する「内裏前殿」、官僚が執務した「朝堂院」、「朝集殿」、「朱雀門」などが南北の同一線上に連なる構造で、その南北の中心線から左右対称に建物、回廊が配置されている。その後、造営される、藤原京や平城京、そして、奈良時代の後期難波宮、それを移築した長岡京、そして平安京のモデルとなる、日本で初めてと言える規模の大きな本格的宮殿である。なお、朝堂院の広い中庭については、よく中国ドラマや韓国ドラマでも見られる、朝廷で官僚が居並ぶ姿がここでもあったと思われる。

②一つの回廊に二つの廊下通路をもつ格式の高い「複廊」があること、その土壁は白壁で、その輝くような白は大変珍しい火山灰が入っていること。火山灰が使われている白壁は、

あまり例がないが、大化の改新時に右大臣についた蘇我倉山田石川麻呂が飛鳥で建立していた山田寺で使われている。山田寺は、今は興福寺にある国宝「仏頭」がもともと本尊として安置されていた寺で、倒壊した塀がそのままの形で発掘されるなどの有名寺院である。石川麻呂が謀反の疑いをかけられ、649年に自害して、山田寺の造営が一時ストップしたが、その直後に造営が開始された難波長柄豊碇宮でも、同じ白壁が使われていたことは興味深い。私は、異変で工事がストップした山田寺の技術者が難波宮に来たのではないかと考えている。

③内裏南門の両側に八角形の建物を有するという、中国朝鮮でも例のない形式を採用していること。二つの八角殿は、何に使われた建物なのかわからない。法隆寺の夢殿など、寺には八角殿があるが、宮殿の門に使われた例にはない。私は、中国や韓国で古い都の遺跡で注意深く見て回ったが、ない。ただ、門以外では、元高句麗の丸都山城(好太王の時代の都、現中国の集安市)で斜面を4段に分けた敷地の第二段に二つ並んだ八角堂(祖廟か)があった、その痕跡の遺跡をみた。しかし、門ではなく、建物礎石群の中に二つ並んでいたもので、難波宮とは明らかに違うものと思われる。唐の三代皇帝高宗が651年に建立の詔を発し則天武后がその遺志を継ぎ推進し、688年に完成した洛陽の明堂が八角建物(再建、地下に遺構あり)であったが、神霊と人民が集う神聖な場所であり、帝王が建てなければならないと唐の李白が書く重要な建物であるが、これも門の両脇ではない。



大阪歴史博物館から見た難波宮跡公園の中心部。
下(北)から内裏、大極殿(復元)、朝堂院と並ぶ遺跡

④朝堂院の建物が平城京や平安京などの他の都の宮殿では8堂ないし12堂であるのに対し、難波長柄豊碕宮は14堂以上（未発掘部分あり16堂説もある）と多いことなど、古代日本で他に例のない立派な宮殿である。

⑤中核の宮殿の東側や西側にも複数の官衙群が存在し、特に、NHKと大阪歴史博物館の地下遺構は、大規模な倉庫群「大蔵省（おおくらのつかさ）」の跡で、保存公開されている。なお、この敷地からは、別にその約2百年前の5世紀の倉庫群も16棟発見され、90㎡の高床式倉庫が1棟復元されているが、このような大規模な倉庫群を必要とするのは豪族以上の勢力であると考えられ、百舌鳥・古市古墳群を作った王権が、近くの難波の堀江（日本書紀で、仁徳天皇が掘った堀江とある）と考えられる大川（旧淀川）の港（「難波津」の有力候補地）の機能を有効利用するため、その近くの台地上に巨大倉庫群を作ったものと考えられている。「難波津」は国際的な港で、海外との往来も多く、例えば、大化3年、新羅の金春秋（後の新羅第29代武烈王、660年に百済を統一した）も使いとして来た日本書紀にある。新羅、唐と戦った白村江の戦いの約15年前の事である。

前期難波宮は、その後も、壬申の乱後即位した天武天皇が「羅城を築く」（日本書紀）など発展したが、天武天皇が亡くなったのと同じ年686年に、今のNHK大阪放送局や大阪歴史博物館のある北西地区の、「大蔵省から失火してことごとく焼け」（日本書紀）、一度消滅した。伊勢神宮などと同じく、前期難波宮の屋根は瓦葺ではなかったため、屋根の素材に関しては何も遺物が残らないほどの大火災であった。掘立柱穴から、燃えた跡のある土が発見されており、それが、この地に難波宮があった有力な証拠の一つとなっている。

奈良時代726年になって聖武天皇が、燃えた難波長柄豊碕宮と同じ場所に全く同じ南北軸を中心線として、難波宮（後期難波宮と言う）を造営し、平城京の副都とした。この後期難波宮は、前期とは違い、内裏と朝堂院を南北に分離し、朝堂院の北側に接して大極殿を設けており、奈良時代後半の平城京の建物配置とよく似た形である。朝堂院の建物数は、それを移築した長岡京と同じく、8堂。しかし、難波宮に隣接する地域から五間門を2つ持つ格式の高い区画や、複数の官衙の跡が発見されており、全体の規模は、必ずしも小さくなっているわけではなさそ

うである。なお、後期難波宮は、大極殿などの主要建物は瓦葺とし重い屋根を支えるために柱の下に礎石を用いたが、内裏は古式に則した掘立柱形式で茅葺か板葺で建てられた。今でも、古い神社など格式の高い建物は、瓦ではないものも多い。式年遷宮で葺き替え中の上賀茂神社の檜皮葺の屋根に上らせてもらったが、檜皮の調達が大変だという話を聞き、難波宮の屋根に思いをはせたことがあった。大規模な建物群は、瓦でもその他でも、調達が大変である。長岡京に難波宮の宮殿が移築されたのも、資材の調達の問題があったと思われる。ちなみに、上町台地に瓦屋町という地名があるが、徳川幕府から瓦の土取りを許可されていた場所の一部で、その地区の遺跡では大量に表土が削り取られており、例えば、熊野街道の大阪ルートの一部や豊臣大坂城の惣堀の一部がわからなくなるなどの遺跡破壊が結果的に行われている。

聖武天皇は744年に難波遷都を行って当地は再度、都となった。平城京に都を戻し、東大寺、大仏建立を行うのはその後の事である。後期難波宮の建物は、その後もそのまま存在したが、784年に桓武天皇によって造営された長岡京に瓦や礎石もろとも移築され、大阪の地から消え、その後、豊臣大坂城内、徳川大坂城の武家屋敷、明治以降は陸軍の拠点が置かれ、人々の永住がほとんどできない時代が続いたためか、やがてその場所は忘れ去られた。そして、難波宮の所在地だと確定（再発見）されるのは、長岡京移築から1177年後の1961年、山根博士らの、後期難波宮大極殿の発見まで待たねばならなかった。歴史の継承には、継続的な人の営みが大事である。

私は、大阪歴史博物館で、この時代の遺跡の説明ガイドを行っている。大化の改新の中身については、紙面の都合で今回、説明できないが、「戊申年（648年か）」木簡、「五十戸（大化の改新詔にある行政単位）」木簡、日本最古の万葉仮名「皮留久佐乃皮斯米乃刀斯（はるくさのはじめのとし）」木簡など多数の遺物が周辺から出土しており、更には、朱雀大路など「難波京」の存在を思わせる遺跡も複数出土しており、新たな論争を巻き起こしている。歴史的に重要な古代日本の首都の中核宮殿である難波宮の所在地がかつて分からなくなった様に、日本の歴史には不明なものが多く、先入観なく、研究していく必要がある。

福岡支部

1. 九州大学アカデミックフェスティバル2016探訪記



嶋田 正明氏
1979(昭和54)年卒

10年間九州大学ホームカミングデーとして続いて来た伊都キャンパスでのイベントは、11年目を迎える今年から、参加者を在学生、地域住民まで広げて九州大学アカデミックフェスティバル2016として10月15日(土)に開催されました。

オープニングは、九州大学学生歌「松原に」の熱唱でした。久保総長挨拶に続いて、貫九州大学福岡同窓会長・経済学部同窓会長が同窓会と地元経済界で九大の発展を応援しようと挨拶されました。貫会長のお話を伺っていると全学の同窓会活動を経済学部同窓会が支えている部分大きいと感じました。その後は、福岡同窓会理事の山縣由美子さんの総合司会で進行されました。

山川賞を受賞した現役学生、農学部4年生の辻尚道さんのゾウムシの研究の話、21世紀プログラム4年生の井上陽南子さんのソウル大学留学を経て今後法科大学院で学ぶ志を見つけた話を聞きました。山川賞とは、山川健次郎初代総長の名を冠した賞であり、九州大学教育憲章が指向する、人間性、社会性、国際性、専門性に対して優れた志を持ち、学業成績が優秀な学部学生を選考し、奨励金を給付するものです。

休憩時間に磯谷経済学研究院長にお会いしました。「せっかく山川賞を授与するなら山川健次郎の紹介を山縣さんがすれば良かったね」と話されました。山川健次郎は元会津藩士で同年代の白虎隊が自害したことはご承知の通りです。明治維新後、元会津藩士ということで政府の要職には就けませんでした、その能力を教育界の創業に発揮しました。東京帝国大学、京都帝国大学、九州帝国大学のそれぞれ初代総長に就かれました。明治工専・現九州工業大学の創学にも尽くされ初代学長になりました。山川賞の学生の志に懸けるという主旨は正に山川健次郎に繋がると思います。実は磯谷院長は山川健次郎の直系の後輩なのです。山川健次郎は会津藩校の日新館で



貫会長挨拶

学びましたが、磯谷院長は会津高校(元日新館)の卒業生です。伊都キャンパスの入り口には山川健次郎の胸像があります。お立ち寄りの際はどうぞご覧ください。

芸術工学科出身でNHKアナウンサーの佐々木理恵さんが、「社会人になって色々な課題を乗り越えて行く上で、デザインを学んだことがとても役に立っている、今でも困難に突き当たった時は、芸術工学科を訪れて原点に立ち帰っている」と話されました。経済学部同窓会東京支部の杉副支部長は、「佐々木さんのような美人のアナウンサーが同窓会の進行をするととても同窓会が盛り上がる、東京支部の司会をぜひ佐々木さんをお願いしよう」と希望しておられました。

他にメインのスピーカーで九州大学の水素プロジェクトのリーダーである佐々木一成工学部教授の講演、お台場にあるフジテレビ本社社屋を新社会人の時設計した鶴飼哲矢芸術工学部准教授の興味深い講演がありました。この後の同窓会と現役学生との交流会もワクワクしました。皆さん来年機会があったら、一緒に参加して、母校の九州大学、同窓会を盛り上げていきましょう。



交歓会の様子

2. 企業入社後の心構えと人脈造り（講演要旨）

九州大学アカデミックフェスティバル2016に併せて、九州大学福岡同窓会主催イベントとして「同窓生と在学生の交流会」が開催され、経済学部同窓生の右田氏をご講演されました。以下は、その講演要旨です。（文責：福岡支部事務局）



(株) ホークスタウン特別顧問
右田 喜章氏
 1967(昭和42)年卒

はじめに

学生さんに仕事に関する体験談を話して欲しいという依頼でしたので、私の経験をもとに働く上での心構えや人脈づくりについてお話しします。

なぜ働くのか。働くとは傍（はた）を楽にすること。社会だけでなく、自分の両親、子供たちを楽にすること。

顧客目線。話しているお客様が何を望んでいるのかを先取りしてそれに対応すること。

学校と会社の違い。学校には授業料を払いますが、会社では給料をもらう。だからそれだけの厳しさは覚悟してください。

自分の評価と他人の評価は違う。人は自分の能力を高く評価する傾向がある。他人をうらやんでおかしくなる人もいる。人間は自分に甘いということを頭に入れて仕事を。

少なくとも3年間は会社の内容を知るためにがんばれ。学校の勉強は短期的には会社であまり役に立たない。まず業界の動きを知り、会社が何をめざしているのかを知る。自分の目標だけ知って、会社の目標を知らない人が結構います。会社の存在意義を知れば、お客様のところにおいても、自分の会社の話をも自信を持って話せます。

つらさに耐えること。私は高校を苦学して卒業しました。でも、高校の時の苦労が銀行に入って役に立ちました。同期の話を知ると、同期生は皆苦労している。つらさで会社をやめた人もいますが、途中退社で良くなった人は少ない。負けずにがんばって欲しい。

能力よりもやる気と努力。発想や自分の能力に自信があるとあまり勉強しない。やる気と努力の人が最後は勝つ。

いやなことから逃げない。銀行では融資を断りに行くのが一番つらい。しかし、そういう嫌なことか

ら先にすると次のことが順調に流れる。

仕事の効率アップは整理整頓と段取り。物をさがすのは時間の無駄。何かやる時は段取りをちゃんとやる。段取りによって速さが違う。

成功の反対は何もしないこと。失敗したら失敗したことで強くなる。そしてこの次はそんな失敗はしない。何もしないと何も伸びない。九大の卒業生は優秀で頭がいいですから、自分から何かを見つけてやろうという意識で動こうという人が少ないような気がします。失敗をおそれずに元気を出して仕掛けて欲しい。

語学力を磨くこと。若いうちに語学を勉強しておくこと。今から海外との取引が多くなります。日本は人口減で需要が減りますから、日本で物を売ろうとすると価格競争しなければいけない。価格競争はもうからないわけですから、海外の市場にいかねばならない。そうすると語学力が必要になります。

イエス・ノーをはっきりいう。外国と商売する時は、イエス・ノーをはっきりさせる。そうしないでニコッと笑うと承諾したと思って、向こうはどんどん話を進める。だからイエス・ノーをはっきり言えるように。言うためには自分の考えをもたねばならない。

人に友情、^{あきな}高い無情。人には情を通じてつきあわなければいけないけど、高いは無情。特にグローバル化のなかで外国とつきあう場合は情なしでやっていくということ。

世界の動きと日本経済は繋がっている。イギリスがEUを離脱するとか、アメリカの利上げとか、いろんなかたちで世の中が動いている。日本の経済にも影響します。新聞とか本をよく読んで、海外の状況を勉強すること。

20代は優秀、30代はふつうの人、40代からは会社のお荷物とならないように。九大を卒業して、会社



講演の様子

に入って会社の勉強をしっかりとしなければ、こういうふうと言われることもある。

人脈は信用とこまめな気遣いの積み重ね。時間も約束も守る。目標達成に全力をつぎ込む。結果報告を忘れない。〇〇会に入会したら一生懸命やる。できないなら入会しない。手を抜いたらばれるし、会の雰囲気をこわすし、信用を落とす。

相手の表情を見ながら話す。スマホばかりしないで人の顔色を読む努力をする。人間関係の向上につながります。

挨拶状をこまめに書け。銀行時代のピーク時には3000枚くらい年賀状を書いていた。必ず一言書き添えていた。そしたら、相手が名前を覚えてくれる。

見返り（報酬）以上に働く。待遇の良い他社を羨むな。

準備と努力と笑顔は運を呼ぶ。私も銀行が非常に厳しい時に、あなたの銀行は大丈夫かと聞かれたことがあるが、ニコッと笑って答えたら、安心してくれた。

おわりに

人脈という財産のおかげで75歳になった今も仕事をしています。

最後に徳川家康がいった言葉を紹介します。「最も大きく人を喜ばせた者が、最も大きく栄える」。

3. 福岡支部交流ゴルフ会、第61回コンペを開催！ ～ 11月20日（日）伊都ゴルフ倶楽部



仙台うみの杜水族館 代表取締役社長

木村 博氏

1983(昭和58)年卒

皆さま、こんにちは。
経済工学科、昭和58年卒の木村（北原ゼミ1期生）です。

平成28年11月20日（日）、歴史ある伊都ゴルフ倶楽部で第61回経済学部同窓会コンペが開催されました。貫会長の人徳で段々と組数も増え、今回は14組の大コンペとなり、晴れ渡ったこの伊都の空のもとで思いっきり楽しくプレイができました。5年前までは生まれ故郷の北九州で勤務していましたが、その頃は4、5組のコンペだったと記憶しております。その後、沖縄勤務となり、前夜にミニ同窓会を行い、二日酔いと闘いながら参加しておりました。

今回は昨年仙台の水族館へ異動となった為、方向は変わりましたが、1000km以上の距離を問題とは



伊都ゴルフ倶楽部クラブハウス前で集合写真

せず参加させて頂きました。前夜に高木先輩（昭和57年卒）からご馳走になった福岡市西区西の浦産のヤリイカと焼酎のパワーで、ここ一年仙台で低迷していたゴルフが一举に沖縄黄金時代まで回復することができました。この同窓会コンペに参加する楽しみはプレイのみならずゴルフを通じた我々九大経済同窓生の交流にあると思います。

私事ですが、東北震災復興の一環として三井物産が初めて水族館事業に投資を行い、そこへ昨年3月異動しました。民間企業ですから、実利を伴うことは当然のこととして、震災発生から5年以上経った今、心の復興・癒し、安らぎを多くの方に与えることも使命としております。地域の方々の期待を裏切らないよう日々、水族館経営の勉強を重ねている次第です。そういう中、今回のコンペでは、九大経済学部同窓生のマリンワールド海の中道の岡村社長（昭和63年卒）と知り合うことができました。

開業2年目を迎えている仙台うみの杜水族館とは違い、マリンワールド海の中道は28年振りの大改修を行っていて、2017年4月にリニューアルオープンする予定です。展示テーマを従来の「対馬暖流」から「九州の海」へ一新し、生き物も、彩りも、スピードも各県ごとに表情を変える海の世界を表現するとのことです。一方、わが仙台うみの杜水族館は1階が三陸のうみ、2階が震災復興支援の御礼とし



貫会長と優勝者の森山敦文氏（右）

ての世界のうみ、それと日本では最北端の屋外スタジアムでアシカ、イルカのパフォーマンスを楽しめる3つのゾーンから成り立っています。特に1階三陸のうみでは南の水族館のカラフルな魚たちとは違い、市場に並ぶ魚が中心となりますが、寒流と暖流がぶつかる世界三大漁場の一つ、三陸沖の生き物たちの命きらめく豊かなうみを表現しています。うみとは海と生まれるの産みと二つの意味を備えています。是非、皆さま方にもこの東西水族館の醍醐味を味わって欲しいと思います。

今回の交流ゴルフ会は平成29年5月14日（日）に開催とのことです。皆様是非、職場の同窓会組織や同級のご友人等でお誘いあわせのうえ、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

4. 福岡支部 平成28年忘年会を開催



(公財)九州経済調査協会
事業開発部 次長
岡本 洋幸氏
2010(平成22)年QBS修了

平成28年12月7日（水）、八仙閣本店で九州大学経済学部同窓会福岡支部の忘年会が開催されました。私は初めて参加しましたが、参加してびっくり。ちょうど100名の同窓生が集う大忘年会でした。去年は20名程度の忘年会だったらしいですが、今年は、貫同窓会長兼福岡支部長をはじめ、いつも参加していただいている同窓生、福岡の企業に勤めている中堅、若手の同窓生にも多数参加してもらい、一気に増えたとのことでした。参加者の年齢層も幅広く、参加者名簿をみると、昭和26年卒から平成26年卒の同窓生の名前が掲載されていました。大学からも、福留先生、遠藤先生、藤井先生、潮崎先生、小室先生が参



忘年会の様子



「松原に」を熱唱

加されていました。

忘年会は、まず貫会長がご挨拶され、同窓会事務局局長でもある藤井先生の乾杯でスタートしました。自由懇談時になると、会場内で大移動が始まりました。地元勤務しているとはいえ、参加者の多くは徐々に顔を合わせる方が多く、思い思いに出身ゼミや部活つながりで集まり、再会を祝しておられたようです。学生歌「松原に」の歌詞にある“松原に沸き上がる^{うたげ}宴うた”の再現となりました。大抽選会やビンゴゲーム大会も開催され、九州電力、西部ガス、西日本鉄道、八仙閣各社から商品が提供され、盛り上がりました。あつという間の2時間でした。最後に、懐かしい校舎と最新の伊都キャンパスが交互に映る映像を見ながら、「松原に」を参加者全員で熱唱し、最年長の昭和26年卒の原田先輩が一本締めを行い、忘年会は閉会しました。

初めての同窓会行事への参加でしたが、気軽に参加できる楽しい会でした。忘年会の幹事をされていた西部ガスの皆さん、楽しいひとときを過ごさせていただき、本当に有り難うございました。総会、ゴルフ会に次ぐイベントとして、忘年会がこれからも年々盛り上がり参加者が増えるのを願っています。QBS（九大ビジネススクール）卒の参加は私一人でしたが、来年は仲間を誘って参加しようと思いました。



5. お知らせ

(1) 平成29年度 福岡支部総会のご案内

福岡支部では総会・特別講演会・懇親会を下記の通り開催いたします。万障お繰り合わせの上、奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時 平成29年6月9日(金) 18:00～20:30

場所 ソラリア西鉄ホテル 8F

(福岡市中央区天神2-2-43)

TEL (092) 752-5555)

(2) 交流ゴルフ会第62回コンペのご案内

福岡支部では、恒例の標記交流ゴルフ会を下記の通り開催します。ご友人等お誘いあわせのうえ、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時 平成29年5月14日(日)

第1組 8:04スタート

場所 伊都ゴルフ倶楽部 糸島市香力474

TEL (092) 322-5031

※メール、郵送、同窓会のホームページなどでご案内していますが、本会報をみて参加を希望される方は、下記事務局までご一報ください。

<上記お問い合わせ先>

福岡支部事務局 高木、国生

公益財団法人 九州経済調査協会 内

TEL (092) 721-4900

E-mail soumu-02@kerc.or.jp

大分県支部

大分県支部総会が、平成28年12月8日(木) 18時00分、33名の会員の参加の下、大分駅南側に隣接するホルトホール大分で開催された。

総会は、ホルトホール大分2階のセミナールームで開催され、高山泰四郎支部長(昭39卒)の挨拶の後、議事に移り、前年度の経過報告・決算を承認した。

その後、大分銀行頭取後藤富一郎氏(昭53卒)により「金融業界の現状」と題した講演があり、マイナス金利政策に至る背景や影響、今後の消費の動向等のお話があり、参加した会員全員が熱心に耳を傾けていた。

最後に学生歌「松原に」を全員で合唱し、記念写真撮影後、総会を終了した。

引き続き19時から、ホルトホール大分3階のホルトガーデンで懇親会が開催され、貞包博幸副支部長(昭42卒)の挨拶・乾杯で参加者の交流が始まった。

懇親会の参加者は34名で、うち1名は教育学部卒業の山本康裕氏(平5卒)であった。山本氏は、今回は特別参加であり「平成29年3月に九州大学大分支部全

体の総会を開催予定であり、是非とも皆さん参加してほしい。高山泰四郎氏と後藤富一郎氏の2人に経済学部の発起人をお願いした」との紹介があった。

今年の懇親会も昨年の懇親会同様、昭和30・40・50年代卒業の会員と平成以降卒業の会員とが同じテーブルを囲んだこともあり、なごやかで盛大な雰囲気での懇親会となった。

最後に、田中修二副支部長(昭46卒)による万歳三唱を行い、20時30分再会を期して閉会した。

【大分県支部事務局長 工藤 順一 1980(昭和55)年卒】



同窓生健筆模様

秀村ゼミ始まりの頃



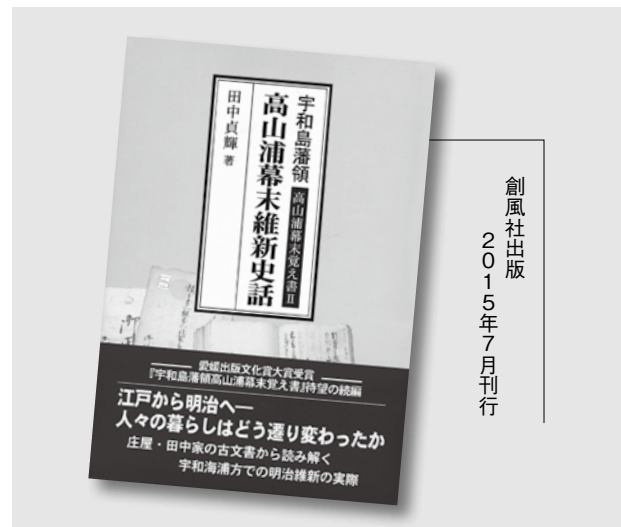
田中 貞輝氏

1957(昭和32)年卒

1、昭和30、31年度の秀村ゼミを受講した私は、卒業(昭和32年)後も先生のご指導を仰ぎながら、我家に残る幕末の古文書の整理解読と、その中に書かれている幕末の故里高山浦で起こったことあったことを、地元の人々に読み易く分かり易く紹介するための冊子「高山浦幕末覚え書」を地元の希望者に配布して来た。このことは、会報第47号(平成21年11月15日)で「宇和島藩領 高山浦幕末覚え書・ある古文書所持者がしたこと」という題で紹介させて頂いている。「覚え書」はその冊子10冊目迄をまとめたものである。

その古文書の整理解読を始めた頃、先生からは「目録が出来て始めて文書は学会の共有財産になる」と云う事で、文書目録作成のご要望も寄せられていた。「おっしゃる通り」と分かってはいても、当時としては出来るかどうかの見通しも付け難く、辛うじて「何時の日にか」という気持ちだけを持ち続けていた。それでも2015年1月には、何とか総数1800点余りの目録を作り、それに我家の来歴を添えて先生にお届け出来た。古文書の整理解読を始めた昭和46年(1971年)以来34年振りの答案提出である。先生は大変喜ばれ、「全く圧倒された。感激している。九大経済学部という学びの場での出会いがかくまで進んだかと、九大経済学部に心から感謝しました。教師冥利に尽きる」とまでのお便りを頂き、人生最後の答案に超弩級かつ最大の三重丸を頂いた気分で私は舞い上がってしまった。

「覚え書」は10冊目以後、「鰯漁の事」、「庄屋家督岩井の物語」、「幕末飲酒模様」、「公のお金の取扱を巡って」、「明治という時代へ」・「高山浦のかたちと暮らし」、「諸色高値」の7冊を出して一区切り付けたところ、出版社の方から「覚え書続編」ということで出版の話があった。前回の「覚え書」が文字



創風社出版

2015年7月刊行

通り出来事主体だったので、今回は幕末の高山浦が、勢いを増す商品流通と物価騰貴に為す術も無く揺さぶられて解体し、その後に色々な表情を持った明治がやって来た、言うなれば我が高山浦の明治維新をまとめた。「宇和島藩領 高山浦幕末維新史話」(創風社出版)である。

次の五話からなっている。

- 第一話 高山浦のかたちと暮らし・幕末村政要覧
- 第二話 鰯漁の事
- 第三話 公のお金の取扱を巡って
- 第四話 諸色高値・明治への地鳴り
- 第五話 明治という時代へ・幕末の終わり

幕末から明治へかけてのご維新は、とかく京都や江戸の大舞台での大物主人公中心に語られ書かれがちだが、同じ時間は我が故里高山浦にも流れていた訳で、そこのご維新はどうだったかをまとめてみようと思った。

そして文書目録で超望外のお褒めを頂いた余勢を駆ってというか、お褒めに甘えてというか、無謀にも、恐る恐るの気持ちで、先生に序文をお願いしたところ、先生から直接お電話で「書くよ」とのご返事があり、これまた再び天にも昇る気持ちだった。頂いたご文章は約2200字余り、秀村ゼミを始められるに当たっての先生のお気持ち、卒業以来の古文書を巡っての私とのご縁等々が温かく書かれており、「序文を書くつもりだったのに、次々と思ひ出に圧倒されて、序文らしい序文は書けなくなっているのに気づいた」とまで書かれて結ばれていた。

次の題でA4用紙1枚に目次も添えて跋文として本の中に挿入している。

「高山浦幕末維新史話刊行に寄せて
田中貞輝君のこと 序文にかえて
九州大学名誉教授 秀村選三」

2、文章は先生がいわゆる秀村方式のゼミを始められるに当たってのお気持ちから書き始められている。大変貴重な記録であり、当時の経済学部の雰囲気との中で新しい方式のゼミを始められるに当たってのお気持ちがよく伺われるので、先生のお許しを得て、その箇所全文を紹介させて頂く。実はこのためにこの投稿も思い付いた次第である。

「当時の学生たちは彼らに魅力的なマルクス主義の書物に依存して手際よく学会の論文をまねた報告を作成する風潮であったが、私は学生自ら史料に基づいて学び、現実の社会経済の歴史が学会の研究書や論文の筋書き通りであるのか、否か。明治期の新聞や雑誌、年報、報告書、統計書等々を、あくまで実証的に丹念に読み、学んで、予想した筋書き通りには容易にいかぬことに悩み、学者先生からの借り物の学問でなく、学生自身が考え、苦闘せざるを得ないように仕向けたが、指導する私としても、それまでは学生が多くの本を読んで要領よく纏めたものを評価するだけで気楽であったが、新しい方式に変えてからは近世専門の私としては、学生と共に史料にもとづいて近代を学ぶ試練の時であった」。

この後に「こうした時に田中君が私の研究室に来て、彼の家が四国宇和島地方の地主で、家に近世・近代の文書があるので、それを利用して地主経営の論文を書きたいと言ってきた」と続き、「彼が文書をどれだけ読めるか、途中で挫折しないかと不安であった」とも書かれている。

それでも、私が丸一年かけて、自作地主としての

我家の明治大正期の土地所有、手作り地での栽培作物とそれに係る雇用労働力、収支内容の変遷などを、兎も角も論文（明治大正期の地主経営）にまとめて提出したところ、先生は「私自身も嬉しく、この時から学生の論文を研究室に保存することとし、ゼミの後輩たちにも閲覧させて各人努力するように仕向けた」と書かれている。秀村ゼミの始まりである。

当時は経済学部の黄金期とも云えるマルクス経済学全開の時代である。それだけに秀村史学へ向けられる周囲の眼差しは必ずしも平穏なものでは無かったらしく、ご退官に当たって同窓会報第11号（昭和61年10月1日）にご出稿された「一つの学部に40年」の中で、「私の若いころには経済学部も一義的な価値観が支配的で、ずいぶん肩を張った息苦しい時代もあった」と書かれているし、頂いたお葉書の中で、「恩師（宮本又次 筆者注）の複数主義の歴史観だったので、白眼視されていた。君たちのような学生が居て呉れたのがどれだけ心強かったことか」と書かれていたこともあった。学生であった私には窺い知れなかった秀村ゼミ創成期を包む経済学部内の空気である。

当時のマルクス経済学が今の九大経済学部でどのように継承されているかを私は知る由も無い。ただ先生の私に対するお心遣いやご指導は昭和30年度のゼミ受講以来全くお変わり無い。恐らく学問に対するご姿勢も同様で、その結果が輝かしいご業績となって開花結実されているものと私は信じている。

先生とのご縁のお陰で、卒業して60年経った今でも、ゼミから続く古文書調べ（遊び）を続けることが出来ている。私は改めて「九州大学は良い大学だった」との想いを強くしている。

『生産的労働概念の再検討』



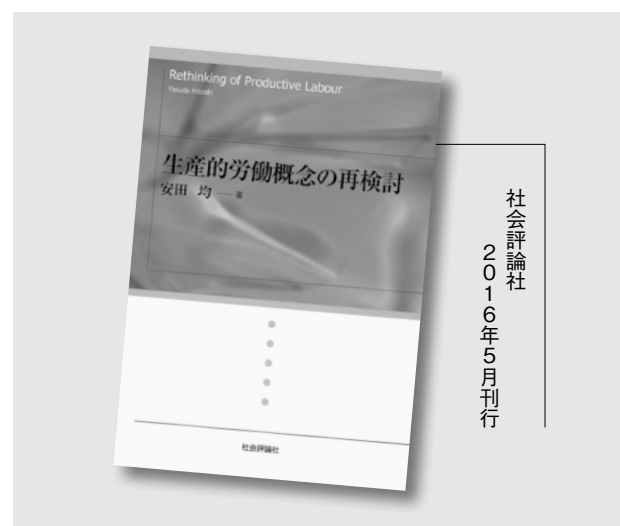
山形大学人文社会科学部教授

安田 均氏

1984(昭和59)年修士修了・博士入

2009(平成21)年博士入

経済学史上、特定の労働ないし産業を「生産的」と捉える考え方は重商主義批判の流れのなかで出現した。「経済学の父」アダム・スミスは、一方で生産的労働を「それが加えられる対象



社会評論社
2016年5月刊行

の価値を増加させる部類のもの」と付加価値視点で規定しながら、他方で「ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりする」とモノ視点で規定するという二重規定を冒している」と学んだ記憶のある方もいらっしゃるだろう。

『資本論』でも同様の二重規定が認められ、戦後、わが国でサービス産業が拡大するなか、その付加価値を国民所得に含めるべきか議論された際、投入された労働が生産的労働か否かという形で論争的になった。

しかし、例えば、家庭内の家人によるサービスは、モノ視点では、有体物を形成しない不生産的労働という点で他のサービス労働、私学の教師や家庭教師の労働と区別されないし、付加価値視点では、私学の教師のように付加価値をもたらすが故に資本の投資対象となる生産的労働でもなく、家庭教師の労働のように収入から支出される不生産的労働でもないため、労働ならざる活動としてしか位置づけられて来なかった。

また、複雑労働も、典型的な価値形成労働である単純労働とは異なり、特別の訓練（費用、期間）が必要であるため、その理論的位置づけが久しく議論になっていた。

議論膠着の原因を生産的労働が価値形成労働と表裏一体的に捉えられていることに求め、それぞれのメルクマールを定量性、量的技術的確定性に区分けしたうえで、多様化する労働の理論的位置づけを試みたのが本書である。

本書は、経済理論学会『季刊経済理論』掲載の4篇の論文、能力主義的労働の理論的可能性（2008年、本書第3章）、生産的労働概念再考（2011年、第1章）、消費における労働一家庭に残る労働（2013年、第4章）、複雑労働の理論的可能性（2015年、第2章）に全体を解説した序章を加えた課程博士の審査論文（2015年度）を基にしている。

課程博士は、論文提出が課程修了3年以内と期限づけられている。ところが、私は1991年に山形大学に赴任している。実は2009年、博士課程に再入学していたのだ。

その間、四半世紀、当人は関心の赴くまま研究に勤しんでいたが、関心は膨らみ、逸れる。関心が動けば、従来の学問的知見と切り結ぶ点も定まらない。

最初に発表した、評価と勤続昇給を特徴とする能力主義的労働の理論上の位置づけに関する論文では、主流の見解と切り結ぶ点を十分には示せていない。その年の学会報告を準備する過程で、ようやくその

論点として生産的労働概念が浮かび上がった。すなわち、能力主義的労働は価値を形成しない生産的労働であり、価値形成労働は生産的労働の部分集合にすぎない、という着想を得た。

その直後、稲富信博先生から博士課程再入学を勧められた時には二つ返事で応じた。経済理論の分野では忘れ去られていた生産的労働概念に新しい捉え方を持ち込んだ、と自信をもっていたからだ。

しかし、論文を提出したのは期限ギリギリとなった。稲富先生、久野国夫先生、深川博史先生に指導委員会を作っていただいたが、なかなかOKが出なかった。

今思えば、フロンティアばかり追いかけてしまい、狭い範囲での攻防になっていた。フロンティアでは刺激的な研究が行なわれていても、学問全体には行き渡っていないから、その意義は伝わりにくい。また、学界全体を見わたしてみると、生産的労働に関する理解は1970、80年代からそれほど進展していないばかりか、最近では、理論上の労働を生理学的な能力の発現と捉える素朴な扱いが目立つ。生産的労働の特徴を労働の手段化に置く本書の枠組みも、生産的労働を労働そのものの言い換え、生産手段を労働対象、労働手段の単なる総称で済ませる通説と対置することにより一層明確になった。

「各章で検討したことの学問上の意義を詳しく説明すべし」という指導委員会の提言に従い、視野を広げ、解説を行なったのが序章および加筆した第1章2節である。

ちなみに私は、法学部4年（78入）、経済学研究科5年（82入）、助手2年、オーバードクター2年の計13年間、九大、福岡にお世話になっている。博論指導委員の深川先生は年上で文字通り先生だが、大学院の同期だ。同期には他に永田聖二（長崎大学）、パタイ・スックソンマイ（旧タイ国大使館）、花田かおる（長崎大学）、林田実（北九州市立大学）、星野郁（立命館大学）、松井隆幸（富山大学）、修士課程で中退した小林忠衛、博士課程入学の原田善教（東北学院大学）がいる。また、博士課程では赤石孝次（長崎大学）、数阪孝志（神奈川大学）が進学してきた。東北に出た私は同窓のつながりが薄い方であろう。

しかし、生産的労働を巡る議論には同窓先学の足跡が残っている。生産的労働概念を巡る論争では、故副田満輝先生、飯盛信男先生（佐賀大学）、教養部にいらした故刀田和夫先生の研究を避けて通ることはできない。女性労働論では本会報前号に寄稿された原伸子先生（法政大学）が第一線で活躍されて

いる。なかでも本書が多く負っているのは高田短期大学にいらした故中川スミ先生の論稿だ。

私は、中川先生が経済理論学会全国大会で「家事労働・労働力の価値・『家族賃金』」の報告を終えられ、会場となった札幌学院大学の教室に拍手の輪が広がった瞬間に居合わせている（1998年10月3日）。その時点では、内部労働市場の勤続昇給する労働に関心を持ち始めたばかりで、生産的労働のことは頭になく、正直ピンと来なかった。

しかし、その後、生産的労働と価値形成労働の異同という観点から読み返してみると、先生の見解は『資本論』解釈に忠実な立場から理論上の労働の射程を広げる試みの極致にみえた。そして、その所説を学問的に位置付けたとき（第4章）、自分も同窓

に名を連ねたように感じた。また、他学部生の演習参加を受け入れて下さった逢坂充先生、学外の『資本論』読書会で指導して下さいました福留久大先生の学恩にも少しは酬いることができたように思えた。

意識していなくても作用を受けるのが影響というものであろう。同窓先学の論稿と格闘したとき、某かの縁を感じたように、これからも同窓の縁を感じることがあるのではないか、そのことを楽しみに研究を続けたい。

リレー随想

九大にて



九州大学名誉教授
大屋 祐雪氏
1951(昭和26)年卒

経済学部90年史編纂の基礎資料作成のため名誉教授の会が、2012年10月6日と27日に経済学部内で行われた。その折、次の予定のため私の九大での“思い出”を語る時間が無かったので、福留（経済学部名誉教授の会・世話人）さんのプランのうち、(1)「戦後の学生時代」、(2)「九大赴任後の思い出」の項は、以前、日本統計学会の竹内恵行（大阪大学）さんから受けたインタビューの記録があるので、それから抜き書きしたもので補充してみた。

(1) 戦後の学生時代

「敗戦」と言わず「終戦」と呼んだ第二次大戦の負け戦で、江田島から広島で一夜を過ごし、原爆で瓦礫の廃墟と化した広島を望見したとき、「戦いに負けるとは、こういうことか」という実感が身に染みだ。動かない貨物車の中で一夜を過ごし、廣

島・門司・博多・鳥栖・佐賀で乗り換えて郷里の柳川に帰った。昭和19年海軍兵学校に入校し突然の敗戦で復員した直後だったので、中学時代の友人達の勧めのままに旧制佐賀高等学校の文科二年への転入学試験を受け、幸い合格して翌昭和22年3月卒業、4月九州大学法文学部経済学科に入学した。家が真宗大谷派の末寺なので、自分では京都か東京の哲学に行こうと淡い夢を持っていた。そういうとき、たまたま、伝習館、佐高の先輩河野秀行さん（九経23年卒）と出会い「大屋君、君は大学どうする」と聞かれ、「京都か東京の哲学に行けたらと思っています」と答えたら、「お前バカじゃないか。俺は東大の経済に入ったけど、とても生活できる状態ではない、それで九大の経済に転学したばかりだ。九大の経済は、法科もそうだけれど戦時中に追放されているから九大がいいぞ！お前も九大に來い」といわれ、家の生計も苦しい時だったし、九大なら家から通学できないこともないので、先輩の言に従ってみた。なんとも自立した自我のない選択だった。

私が九大生だった頃は、数ある経済・経営関係科目の中で統計学といえば「分からない！面白くない！やりたくない！」科目の最右翼に挙がっていた。

今では考えられないことだろうが、旧制高校出身の私が“統計”あるいは“statistics”という語を見聞したのは、九大で高橋正雄先生の統計学の講義に出たときである。経済高等専門学校(戦前の高等商業学校)出のんびとは出身校で、すでに統計学を学んでいたようだったが。

そのころ理学部では北川敏男先生が確率論と統計数学を担当されていた。北川先生はこれまでの統計数学の研究方向、あるいは考え方に満足しておられなかったのであろう。広く哲学や統計学史、さらには社会経済の計量的な分野にまで関心を寄せられ、『統計学の認識』(1948年、白揚社)の書名で、ご自分の統計学観を世に問われていた。この本は当時の若き学徒の統計学への関心を、改めてかき立てた本の一つだったように思う。

高橋先生を“偉いな!”と思ったのは、講義の中で「私は新しい統計学のことは分からない。それで理学部の北川先生に“そのさわり”を何回かに分けて講義してもらいますので、それで勘弁してください」と述べられて、毎回、学生と並んで机に向かい、熱心に北川先生の講義に耳を傾けておられたことだ。

私が入学した昭和22年当時は、マルクスの『資本論』さえ読んでおれば、大抵の単位は取れるという風評があるくらいだった。そういう話を聞いても、旧制佐高では経済学の講義はなかったので、九大での経済原論も経営学も会計学の講義も耳新しい用語ばかりで、なんのこともやら全く理解できなかつた。何とか理解できたのは宮本又次先生の日本経済史と高橋先生の統計学で、“おれは進路を間違えたのではないか”と幾度か後悔した思いがあった。

図書館にある『資本論』は戦前の発禁処分のため、蔵書部数が少ないうえに学部学生が争って借り出すので、いつ行っても“貸し出し中”で、無きに等しい状態だった。今日では到底考えられないことだが! そういうとき、たまたま久留米の古本屋で改造版『資本論』に出会った。譲って欲しいと頼んだが、「交換なら譲りましょう」と言う。戦後のことで古本屋といえども在庫が払底していたからだろう。「僕は佐高の文科なので」と応えると、「西田の本はお持ちでしょう」と言うので、『善の研究』と『自覚における直観と反省』と『哲学の根本問題』などを持っていることを告げると、「それと交換しよう」と応じてくれた。それらは京都の龍谷大学に在学中に亡くなった叔父の本で我が家に引き取っていたものだった。これらの本の交換は私の京都への夢との決別でもあったように思う。

せっかく『資本論』を手に入れたのだから“読まねば”とあらためて決意を固めた。大学へは休学届を出し、自宅で専ら資本論と取り組んだ。1947年6月頃からのことである。理解できたかどうか自信がないまま、とにかく半年かかって資本論の第一巻に目を通すことが出来た。翌1948年、大学に復学したら半地下の学生控室に、「資本論研究会を開きます。場所と時間」の貼り紙があった。出席してみるとチューターは向坂逸郎先生であった。呼びかけ人は三戸公(現立教大学名誉教授)さんで、川端久夫(九州大学名誉教授)さんも居られたような記憶がある。この資本論研究会で小野朝男(元和歌山大学長)さんや、終生の友となる北古賀勝幸(元熊本学園大学学長前理事長)、中谷哲郎(元北九州大学学長)君等と知り合いになる。

三回生になったとき前記の資本論研究会で、一回生を対象に第一章から新たに読み始める「価値論研究会」を始めることになった。そのチューターを高橋先生にお願いしようということになり、私がお願いにゆくことになった。チューターを快く引き受けられて、「大屋君、これからの経済学はマルクスだけではダメですよ。資本論を読むことも大事けれども、ケインズの『一般理論』も重要です。いま大学院の人と読んでいますから出てみませんか」。こうして高橋先生との深い縁が始まった。

九大で教授になった頃「俺はどうして統計学を選んだのだろうか、他にもいろいろ面白そうな学問領域があるのに」と時々自問することもあった。前にふれたことだが北川先生の講義に触発されて半分も理解できないまま『統計学の認識』に目を通したこと、もう一つは、当時、農業政策の教授だった田中定先生の佐賀県本庄村の農家実態調査をお手伝いしたことである。田中先生のゼミ生として調査に参加したことから、調査票の作成の重要さと妥当な実態調査の個票(マイクロ・データ)を適切にグループ分けすれば、そこに事象を貫く発展ないし衰退の様相が、数と量の格差や変化、あるいは傾向や規則性として現れることを実感した。北川先生のrandom sampling調査論と田中先生の典型分析を意図する実態調査論とは、現象把握のための全く異なった方法と思ったが、この二つの調査法の論理が私の心を強く捉えた。それは私にとって学問との初めての出会いであったように思う。

(2) 戦後の大学院研究科

昭和26年(1951年)大学院経済学研究科に進み専攻科目を決めるときには、なんの迷いもなく統計学

を選び、指導教官のお願いに高橋先生の研究室を訪ねた。そのとき先生はニヤニヤしながら「高橋正雄は、統計学以外のことならなんでもやる男といわれています。あなたが私のようにではなく、本当に統計学をやるつもりなら、理学部の北川さん、京都の蜷川（虎三）さん、統計局長の森田（優三）君を紹介しますから、あなたの関心事に応じて指導を受けられたらよいでしょう」とおっしゃって、大学院での指導教官を引き受けてくださった。

大学院での指導教官を引き受けられるにあたって、高橋先生は「これからの統計学は、たとえ社会統計学でも経済統計学でも、ある程度の統計数学の素養がなくてはやっていけません。わたくしも最初から勉強し直しますから、この本（伊藤清『統計数学の基礎』）と一緒に読みましょう」と言われ、先生が福岡に居られる半年は、毎週の勉強会で一問一答の練習問題にも自ら手を染められた。高橋先生の勧めもあって、理学部数学科の北川先生の講義を覗いてみたが、数学専攻の学生を相手に為される授業なので、文系出身の私がどう藻掻いてみてもついて行けるはずはない。“独学”と言えば聞こえはよいが、解らないところはそのつど、理学部の知人に教を請いながら、数理の理解に努めていた。前記の『統計数学の基礎』は北川先生が私のために高橋先生に勧められたテキストだそう。後でも触れるが、高橋先生は当時G.H.Q.（連合国軍総司令部）の嘱託顧問を委嘱されて居られたので、九大では半年の集中講義だった。したがって後半年は私にとって全くの自由な学習期間だった。その自由な期間を統計数学の吾流の“独学”を続けながら、蜷川先生の『統計利用に於ける基本問題』、『統計学概論』、『統計学研究1』を熱心に読んだ。

大学院を終わる頃だったと思うが、社会政策講座の森耕二郎先生から「君は最近なにをやっているかね」と声をかけられた。日頃は無口だが酒が入ると、助手や院生に議論を挑まれるので研究生は皆怖がっていた。その時も酒を飲んであるように見うけられたので、“これは危ない”と直感して「数理統計学と蜷川先生の『統計利用に於ける基本問題』を読んでいます」と答えると、先生はニコニコされて、『蜷川の奴、あの本を書いた頃はレーニンの『唯物論と経験批判論』を、独りコツコツ読んどったよ。奴さんの種本は、きっと、あれだね」と独り言のようにつぶやかれて、「まあ、しっかりやるんだな！」と言って立ち去られた。森先生のこの一言は、私が蜷川統計学を理解する上で大きなヒントになった。

蜷川先生は、この本の主題である「存在と認識、対象と経験」の哲学的理論関係が、「現象と統計」の反映=模写の構図とどう関わり、あるいは関わらないかを脳裡に置いて、この本を読んで居られたのではないかと私なりに考えて、蜷川先生の『基本問題』を読み返した。私が京都統計学派の先生方と蜷川理論をめぐって正面から議論できたのは、森先生の一言をヒントに『経験批判論』と『基本問題』を繰り返し読んだことだと思う。「重要文献は繰り返し読め！」というのが、資本論研究会での向坂先生の直言だった。

私の研究生活のなかで欠かせない出来事として経済統計研究会の発足がある。昭和20年代から30年代以降、国際統計学会なканずく英米の統計学会の流れに呼応して、日本統計学会も統計学の数理化の傾向を一段と高めていった。大学院時代に統計数理の学習に傾斜したのも、そうした学会の動きに対応しようとしたことのあらわれだったと思う。現在では日本統計学会への入会は、会員2名のサインがあれば、誰でも、学生でも入会することが出来るが、私が大学院の頃は、理事または評議員2名の方の推薦と評議員会での承認が必要だった。高橋先生と森田先生の推薦によって統計学会に入会できたことは、今でも自分史の一齣としてよく思い出される。そのためかどうかは推測の限りではないが、その後も森田先生にはいろいろと目を掛けていただいたように思っている。森田先生から「大屋君、統計学会を割るようなことだけは、しないでくださいね」と言われたことが、学会のことに言及するときいつも思い出される。

そのころ社研時代の思考の影響もあって、いつも頭から離れなかった“社会体制と統計”の関係を目に向けた作文を先生にみてもらった。自分では“大論文”のつもりだったが「大屋君、これは統計学の論文になっていませんね。もっと小さい事項でも良いから、統計らしい問題を取り上げてみたら、…」と注意された。それで急遽まとめたのが最初の論文「昭和29年職種別等賃金実態調査について・標本統計の一断面・」で、直ぐに思いつき直ぐまとめることが出来たのは、院生の前期、後期を費やして標本理論と標本調査法を学習していたからである。

昭和31年（1956年）4月、2年ほど早く赴任していた社研時代の友人、中谷哲郎君（前出）の誘いに乗って北古賀君（前出）と一緒に熊本商科大学（現熊本学園大学商学部）に赴任した。2年後、左耳下の腫瘍の摘出で耳下腺ガンであることを熊大病院で

告知された。長男は2歳、あれこれ「ガン」について調べ、さんざん思い考え、悩んだ末に、「やれる間にやれる事をやっておこう」と"ガン任せ"の心境にやっとたどり着き、社会経済体制と統計に関する論稿の執筆や学会報告に"ガン"に対する不安な気持ちを紛らわせていた。

(3) 九大経済学部へ

昭和36年(1961年)の年末、一橋大学の故松川七郎先生(後年、学士院会員)から突然、速達便が届き、「上京のお気持ちがお有りでしたら、いま、法政大学から統計学担当の教員の推薦を依頼されています。自分としては貴方を推薦したいと考えていますが、如何でしょう。」という内容の信書だった。「松川先生からの推薦をお受けしたい旨を直ぐに在京中の高橋先生に電話したところ、「私が松川さんに会います」というお声をいただき、その後しばらくして「九大経済学部での採用が決まったよ」とのお便りをいただいた。

昭和37年(1962年)4月、学部教授会に初めて出席した。学部長を中央に学生時代講義を受けた幾人かの先生方がお見えで、入口に近い席に武野、荒牧、深町君等が掛けていた。議題が終わり事務事項に移ったところ、高橋先生が「今学期の統計学の講義は大屋君にやってもらおうと思うが、どうだろうか?」と発言されると、学部長が直ぐに「大屋君はまだ統計学の講座担当ではないので、いかがなものでしょうか?」、「そうですね」で、事は終わった。そういうことから学部の講座担当教員の重みを初めて知った。

翌年、研究室に吉村正晴先生が突然お見えになり、「君も知っていると思うが、大阪市大の木下悦二君を私のところの助教授に迎えようと思うが、どうだろうか?」と、木下さんの著書『資本主義と外国貿易』(有斐閣)を手渡された。九大に来て初めてのことで、どのように対応したらよいかかわからず、「承知しました」とだけ申し上げたように記憶している。想えば1年前の1月、業績が少ない私を高橋先生はどう紹介し、理由付けして推薦されたのであろうかと内心忸怩たるものがあったことを、その後も人事教授会のたび毎に思い出していた。

昭和42年(1967年)の『九州大学50年史』刊行と創立50周年記念講堂の落成までは、箱崎の大学内は平穏だったが、翌年1月のアメリカ原子力空母エンタープライズの佐世保入港でそれまでくすぶっていた学生運動に火がついた。大学はその対応に追われ、特に経済学部はそれまで教授人事が滞っていたので、

その補充が緊急の課題になってきた。43年(1968年)5月、当時の学部長から片山、近江谷、服部、私の4助教授に業績一覧の提出が求められ、人事教授会で昇進が決まった。そのことは嬉しいことだったが、翌月の6月2日、米軍ジェット戦闘機F4ファントムが箱崎キャンパスに建設中の大型電算機センターに墜落、このため大学は新たな紛争の火種を抱えることになり(詳しくは『経済学部60年小史』12~13ページ)、われわれ4名の新米教授は辞令の交付(辞令は7月1日)も受けないまま、教授会の一員として臨時に設けられる各種の全学の委員会に送り込まれた。

リレー随想

全身全霊でチャレンジ



株式会社フォンテム代表取締役

清水 逸雄氏

1954(昭和29)年卒

私は1931(昭和6)年2月27日生まれで、奇しくも本日86歳の誕生日を迎えました。同窓会との縁が出来て会報へ寄稿の機会を得られました。話したいことが多すぎてなかなか文章に纏まらず、苦勞しています。全身全霊でチャレンジして運命の扉を開けた思いを味わった場面を幾つか綴ってみます。

父の新聞社の仕事で、旧制中学3年まで釜山で過ごしました。戦時下のことで勉強は全くおざなりでした。終戦になって母と私は、父の郷里の金沢に引き揚げました。親戚筋に学校に多大の貢献をした人が居まして、その人脈で何とか金沢第三中学校に転校できました。級友たちの学力の高さに圧倒されました。私は全くの劣等生でした。心配した親戚一同が、金沢中学から第四高等学校への進学に必要な参考書類を本棚一杯に集めて呉れました。この人々の厚意を無にするわけにはいかない、そう心を決めた私は、全身全霊で我武者羅に勉強に打ち込みました。見る見るうちに力がついて、試験で100点満点をとって、嬉しさの余り休み時間に飛んで帰って母に答案を見せたこともありました。劣等生がトップクラスに転身したのです。

やがて父も引き揚げてきましたが、勤務地が福岡でした。福岡を大好きになった父が、母と私を福岡に呼び寄せました。中学4年になる時で、福岡中学に転校願書を出しました。成績表を見てあっさり転校を許可されました。ここでも勉強好きが続いて、翌年15～6倍の競争を突破して、旧制福岡高校理科甲類に進学できました。

六本松にあった旧制福高で、素晴らしい師と友に巡り会え、忘れがたい思い出ができました。二つほど例を挙げます。一つ目は、ドイツ語の山川丈平先生。左程厚くは無いのですが、文法と読本と2冊渡されて、3か月間に全文暗唱しなさい、と命じられました。敗戦日本の前途は、学問のできる若者が担うしかないのだ、そういう気迫で厳しく鍛えられました。私は、再び全身全霊でチャレンジ、何とか目標を達成できました。二つ目は、若くして逝った数学天才・渡辺航、3年前他界した生物学者・中村禎里などの優秀な友人たちとの切磋琢磨。六本松から平尾霊園回りまで散策、草むらに寝転んで青空を仰ぎながら「君、不可知論をどう思う」という議論をするわけです。知らなければ、学校に帰って図書館で調べます、そして今度は相手が知らないような論題を詰め込むのです。そうこうしている間に、中村たちは反戦平和の学生運動に熱中することになります。中村も渡辺も共産党に入ったのですが、私は直感的に論理だけでは前進できない感じがあって、入党はしませんでした。ただ、マルクスをもっと知りたいと思って、理科から転向して九大経済学部に進学したわけです。向坂ゼミ、高橋ゼミで、古典の読み方を教わりました。

1954（昭和29）年に大学卒業で、大日本製薬（株）に就職しました。幸い地元福岡が初任地でした。福岡は、学問を鍛えられ、家内と出会い、大病の母親の命を救われる、という奇跡とも言えるべき運命の土地となりました。

ハッピー主演の映画「ローマの休日」を観ました。あの女優さんが大好きになりました。その頃、友人が紹介して呉れた女性がハッピーのように細い体躯で、10本の指で作った輪にすっぽり収まって仕舞うぐらいでした。これまたハッピー似なのですが、私より7歳年下の初々しい乙女で、いわゆる女っぽいところがゼロでした。もう一つ、運命を感じたのは、母が熊本の植木出身、彼女が熊本の山鹿出身ということでした。これこそ生涯の伴侶だと思い定めて、今でもあると思いますが、新天町の金文堂や積文館でデートを重ね1961年6月29日の結

婚に至りました。同窓会との縁を結んだのも家内です。関西支部で真田丸史跡見学の行事があったとき、はがきを見た家内がどうしても行きたいと言いました。事務局長の中野光男さんに連絡して、歓迎しますということで、夫婦で参加して、すっかり同窓会にはまって仕舞いました。

母は1910（明治43）年生まれですが、苦労続きの前半生でした。50歳の年末12月31日、腹部大動脈の破裂で危篤状態に陥りました。私どもは関西住まいでしたが、伊丹空港で福岡行きの最終便をキャンセル待ちで漸く一席だけ確保できました。母の許に駆けつけて救急車で幾つかの民間病院を回りましたが、どこも対応できないと言うのです。思い切って九大病院に電話しました。「九大の卒業生です。苦労続きの明治の女性の人生をどうしても救ってやりたい、それが小生の最大の課題です。九大病院で救って下さい」。全身全霊で必死の思いを込めてお願い致しました。第二外科（血管外科）の井口潔教授が一人残って年末の部屋掃除をしておられました。願いを聞き届けて下さいまして、暖房も切れた手術室で、助手を呼び集めて、明け方までかかって新年第一号の大手術を成功裡に実施して下さいました。母は生きながらえて93歳の長寿を全う致しました。息子は九大で教えられ、母親は九大で救われました。

1996（平成8）年に常務取締役管理本部長歴任で退職しました。第二の人生でも山あり谷ありですが、目下の課題、いま現在、全身全霊でチャレンジしているのが、旧制高校時代の理科系に戻って、或る効能の「新薬」開発です。実用化の暁には、母校九大へ、特に青春の血をたぎらせた九大経済学部へ、「貧者の一灯」を捧げられることを夢見て、元気に励んでおります。（2017年2月27日）。



初対面のF氏に「お嬢さんですか」と間違われた若々しい妻と。

リレー随想

九州歴史考



森本 廣氏

1971(昭和46)年卒

一昨年、42年務めた九州経済調査協会を退職し、今では趣味の古代史に思いを寄せながら、明日の九州を夢見ております。

筑紫と呼ばれた九州～「古事記」、「日本書紀」に「九州」は登場しない

そもそも、九州という名称はいつごろから使われていたのでしょうか。「古事記」の国生み神話では、九州は筑紫島とあります。「日本書紀」でも筑紫洲であります。時代が下って、九州と大和朝廷の関係が明らかになるのは、527年の筑紫君磐井の乱であります。この時「長門より東は朕がとる。筑紫より西は汝がとれ」は、継体天皇が征討將軍物部麿鹿火(もののべのあらかい)に命令したものです。当時、朝廷はこの地域のことを「筑紫」と呼んでいたこととなります。

西海道と呼ばれた九州

大和朝廷の国家統一は、645年の大化の改新以来、半世紀を経て701年の大宝律令によって大きく前進します。中でも特筆すべきは、「まつろわぬ部族」があまたいる中で、全国諸国の統一宣言を発表したことです。五畿七道の令制国です。各国に国司を置き、わが国は国家としての中央集権体制がスタートしました。

五畿七道のうち七道は、東海道、南海道、西海道、北陸道、山陽道、山陰道、東山道。九州は西海道ですが、私は「九州」という呼び名は、この時に始まったのだと思っていました。「筑前」、「筑後」、「肥前」、「肥後」、「豊前」、「豊後」、「日向」、「大隅」、「薩摩」の九国だから九州だと。同じ思いの方も多いのではないかと思えます。でも、この令制国の中に「九州」という呼び名はどこにも現れません。九州地域は、九国と壱岐、対馬、多根、屋久で「西海道」と定められました。

鎮西と呼ばれた九州

時代は下りますが、屋島、壇ノ浦の戦い(1185年)

で勝利を収めた源範頼、義経は、頼朝より九国を範頼、四国を義経に治めるように指令をうけます。頼朝は当時、西海道と呼ばれた九州のことを現実的に九国と呼びました。さらに、頼朝側近の御家人、武藤資頼、大友能直、島津忠久を鎮西御家人として九州に配置し、九国支配体制を整えます。この時、頼朝は、鎮西九国奉行人を設置しました。

しかし、この関東武士団が九州に根付いたおかげで、鎌倉政府は、二度の元寇を水際で留めることができたのではないかと思います。1274年文永の役は、少弐(武藤)、大友を中心とする九州勢で戦いました。1281年弘安の役では、鎮西大將軍として、北条実政が指揮をとりますが、実戦部隊は御三家を中心とする九州勢です。元寇の後、異国警固役として鎮西探題が設置され、以後、九州のことは、鎮西と呼ばれるようになりました。

九国はあったが「九州」と言えない理由

西海道、九国、鎮西など時の中央政府は九州のことを様々な名称で呼びましたが、「九州」とは誰も言わなかった。それなりの理由があったからでしょう。「九州」とは、中国最古の夏王朝の禹王が九つの州(国)を統一したことに始まると言われています。まさに「九州はひとつ」の意味であります。以後、中国では「九州」のことをわが国とか世界とかの意味に使われている。

わが国でも、例えば武家社会への転機となった保元新制(1156年莊園整理令ともいわれる)の第一条の冒頭に「九州之地者之有也、王命之外、何施私威」(全国土(九州)は、一人治天の君の所有である。王命以外に誰が私的な威光を示すことができようか)の下りがあり、当時の識者の間では、地方のことを九国だから九州などと安易に使えなかったのではないのでしょうか。

九州と呼んだのは足利尊氏

九州を「九州」と呼ぶようになったのは、1336年の九州探題からではないかと考えます。足利尊氏は1336年2月、後醍醐天皇を擁する官軍総大将新田義貞に大敗を喫して、摂津兵庫から一旦、九州に下りました。有名な多々良浜の戦いでは、尊氏・少弐軍2千騎対菊池、阿蘇氏2万騎の戦いに奇跡的に逆転勝利し、大宰府を制します。少弐、松浦党など九州の武士集団を組織化した尊氏は再び、京に上り湊川の戦いで、総大将新田義貞、楠木正成を破って室町幕府を開きます。南北朝の始まりです。この時、九州には尊氏側近である一色範氏を大宰府に残し、初代九州探題に命じました。

西海道、九国、鎮西の地に初めて九州を冠する「九州探題」が設置されたのです。九国探題でもよかったのですが、尊氏は神聖な意味の九州を地方の呼び名として初めて使いました。これは、領土は治天の君のものではないという意味が込められていたのかもしれない。が、まだ戦いの真最中であり、どさくさに紛れて九国を九州としたのかもしれませんが。

「九州はひとつ」を实践した懐良親王

しかし、歴史は皮肉なものです。初めて命名された「九州」が室町幕府統一の方便として使用されたのとは対照的に、この時、九州で勢力を高めていた南朝方の懐良（「かねよし」又は「かねなが」）親王は、九州の武士団をまとめて尊氏の九州探題に対抗しました。懐良親王は、九州統一を成し遂げ、まさに磐井の乱以来、「九州はひとつ」を实践した唯一の英傑となりました。その12年の統治の期間は、「日本国王良懐」を名乗り、独自に中国明の冊封を受けて日明貿易を進めました。懐良の志は「独立国九州」を求めたものとして評価されるべきでありましょう。

さて、それでは今、私たちが使っている「九州」は、いつ、どこで決められたのでしょうか。実は、明治37年に、国定教科書で「小学地理8 地方区分について」の取り決めが行われています。西海道という九国を九州としました。これが今もって継承されています。しかし、大宝律令のように法律で定めたものでないため、中部地域など地域区分が不明確な所も多く、最近の道州制論議では大いに障害となっています。地方分権型政治が言われている今こそ、懐良親王のように、自らの意志で地域をまとめ、「九州はひとつ」として独立するくらいの気概が、今の日本には必要ではないかと思えます。



片山先生が乗船されていた伊号401同型潜水艦

信長片山伍一大尉があわただしく艦長室に入ってくると、紙片を差し出した。それはアメリカ海軍の暗号電波を傍受・解読したもので、日本が無条件降伏したことを伝えていた。」

（「深海の使者」吉村 昭 より）

片山先生は熊本県玉名郡の農家にお生まれになった。海軍兵学校を「成績優秀」でご卒業後、巡洋艦由良等で広い太平洋を転戦され、最後に前述の“どん亀”こと「潜水艦」でパナマ運河を爆撃に行く途中で終戦を迎えた。そして戦後、引き上げ船の船長としてご貢献・ご活躍された。戦時中強運に恵まれた先生も、戦後は戦犯として裁判にかけられそうになり逃亡し、宇部の炭鉱に炭鉱夫として潜伏された。

されど我らが片山先生、この状況下ですら無駄に過ごされなかった。なんと社内で「労働時間研究（ストップウォッチで時間計測し、効率を向上）」を実施して評価され「優秀鉱員」として表彰されたのだ。これを機に正職員登用の道が開けたが、潜伏の身。遂に覚悟を決めて上京の上自首。1ヶ月間留置されたとのこと。幸いにも容疑は晴れ釈放され、九州に戻って印刷会社の守衛をされた。

昭和25年4月、28歳で一念発起し九州大学経済学部に進学し、昭和28年卒業後に経済学部助手、昭和33年4月に助教授、昭和43年7月に教授に昇進された。昭和60年3月に退官され名誉教授に、その後永年の研究成果が認められ、平成7年には勲二等瑞宝章を受章されている。

かくも波乱万丈の人生を歩んでこられた教授がおられるであろうか。先生はただ単に「経営財務論」を研究されただけでなく、かのケインズよろしく自ら投資を实践され好成績(?)を挙げておられた。そのお話は、海軍時代の話とともにご自慢であったので、我々ゼミ生もよくせがんだものだ。

さて、私と言え、片山ゼミは就職ゼミだ。楽勝だ。」などという根も葉もない甘い言葉に誘われてこのゼミに決めた。この30人にもなろうかという大所帯のゼミの発足初日に、私は遅刻してしまい最後の入室者となった。すると先生が「おお〜ッ、君

リレー随想

片山先生とゼミの思い出



中山 悦治氏

1975(昭和50)年卒

「八月十五日の朝を迎えた。南部（伊号第四百一潜水艦）艦長は、姿を見せぬ僚艦の安否を気遣っていたが、通



ゼミコンパ 先生を囲んで

が最後だなぁ、君幹事をやりなさい。」とのご下命をいきなり受けてしまった。申し訳ないことに名ばかりの幹事ではあったが（ゼミの皆さんすみません）、良いゼミ仲間にも恵まれ、勉学に勤しむことはなかったものの楽しい学生生活を送ることができた。とはいうものの、意欲ある(?) 4人の仲間と、ヒルファーディングの「金融資本論」を「読書会」と称して合宿し、「九大山の家」に私のポンコツ乗用車で行った事もある。ご多分に漏れずあまり勉強は手につかず、各人将来の夢を語り今後の就職先などについて情報交換をし、それをネタに「コックリさん」などもしてほとんど飲み会となってしまったような記憶がする。

卒業の前年に、分不相応にも先生から大学院への進学をお勧めいただいたが私には自信がなく、結局翌年「東京海上火災」に就職することになった。その後も先生とのお付き合いは続き、結婚式の仲人をお引き受けいただいたりもした。

海軍の「五省」を誦んじ旧制高校寮歌を高らかに歌われる豪放磊落な先生に対して、奥様は大変穏やかな方で、我々ゼミ生は大変お世話になった。しかし、まだ若い頃先生が庭掃除などしていると「将来のあるあなたはそんなことをしてはいけません。」と叱咤激励される良妻賢母であったとも伺っている。

私はと言えばその後、合併先損保、関連会社、地場企業・政府系金融機関の関連会社などに出向・転籍し、終盤のサラリーマン生活は変化の多いものとなった。リタイア



片山先生ご夫妻

後一昨年、中米のグアテマラにスペイン語留学（遊学？）し、昨年は学習塾の教師なども経験した。そして晴れて今年一月、正にそのスペイン（マドリッド・グラナダ・バルセロナ）へ旅行した。また入学当時「九大マンクラ」で挫折したクラシックギターの練習を数年前から復活した。ギタリストの聖地グラナダの「アルハンブラ宮殿」を偲びつつ、毎日下手な「アルハンブラの思い出」を練習している今日この頃である。



ゼミ合宿仲間の現在 前列左から浅利、筆者 後列左から有須田、富井、藤村の各氏

リレー随想

時を超えた不思議な縁



日本文理大学経営経済学部准教授

工藤 順一氏

1980(昭和55)年卒

1 宗麟の海

平成28年6月18日の大分合同新聞の朝刊から、豊後の戦国大名、大友宗麟（1530～87）を主人公にした歴史小説「宗麟の海」が始まった。大友氏は、鎌倉時代から戦国時代にかけて、九州の豊後国（現大分県）を本拠とした一族で、最盛期の宗麟の時代には、豊後・筑後に加え豊前・肥前・肥後・筑前の6ヶ国と日向・伊予の各半国を領有した。

宗麟が生きた時代は、織田信長（1534～82）や豊臣秀吉（1537～98）の生きた時代でもあるが、織田信長や豊臣秀吉の知名度に比べ宗麟の知名度は低く、大分県でもこれまでほとんど注目されていなかった。それではいけない、もっと大友氏の偉業を顕彰しようと有志が立ち上がり、平成23年4月に「大友氏顕彰会」が設立された。

2 その後の大友一族

大友氏は、第22代当主大友義統よしむね（宗麟の長子）の時に改易となった。豊臣秀吉の死の5年前である。しかし、その子孫は、その後他の大名家の家臣となって存続し、その子孫が今も他県で活躍している。

そうした、大名家の家臣となった「その後の大友一族」の史跡を見学し、子孫の方々々と交流しようと、平成28年9月23日と24日、大友顕彰会の方や大分市教育委員会の方と一緒に福岡県と熊本県を訪問した。

最初に、福岡県みやま市にある尊寿寺を訪問した。このお寺には、大友義統の夫人菊子の墓がある。菊子は、高橋紹運じょううんの妹で、主立花宗茂むねしげの叔母にあたる。1593年（文禄2年）5月、大友義統は豊臣秀吉に豊後国を徐封され、一家は離散する。夫人菊子は立花宗茂を頼ってこの地に逃れ1594年この寺で死亡。寺の玄関の欄間には大友氏の家紋である杏葉紋が掲げられている。

ここで、少し高橋紹運について説明する。高橋紹運よしひろあきまさは、吉弘鑑理の次男に生まれた。吉弘氏は、大分県豊後高田市の箕城を本拠とする大友田原氏の庶流である。紹運は、大友宗麟の命により大友の西の居城である岩屋城と宝満城の2城を継ぎ、立花道雪と共に筑前国を支配することとなる。若くして筑前岩屋・宝満の両城主となったが、その後九州制覇をねらう薩摩の島津義久と戦い討死。享年39。その子の立花宗茂は、後に筑後柳河藩の初代藩主となる。

次に、福岡県大牟田市にある紹運寺を訪問。続いて、熊本県玉名郡長洲町にある立花宗茂の正室「立花閨千代ざんちよ」の墓や、大友宗麟次男親家ちかいえと三男親盛ちかもりの墓所のある熊本市の春日寺 岫雲院、大友家支流の清田氏のながれをひく清田家住宅等を訪問。すべて、大友一族ゆかりの場所である。

同行した大友氏顕彰会のWさんによると、今回の訪問に先立ち、建長寺調査員の方から「大分の方は大友氏改易までの400年しか関心がないように映るが、近県にはその子孫たちが多く、大友顕彰会の活動を広げるにはもっと近県との交流を図ることが重要ではないか」とのアドバイスがあったそうだ。その通りで、今回の訪問を終えて、これまで大分県では見えなかったものがたくさん見えてきた。大分県では滅びたものも、近県では大切に保存されていた。

何よりも嬉しかったのは、熊本県の「吉弘さん」に会えたことである。吉弘さんは、80代後半の優しい顔立ちの方で、門外不出の初公開の貴重な古文書を持参してくださり、そのコピーをくださった。古文書は、大友宗麟から吉弘左近太夫（鑑理）に宛て

た書状と、大友義統から宗像権左衛門入道・吉弘統幸むねゆきの2人に宛てた書状であった。熊本での吉弘さんとの出会いが縁となり、私は、大分県別府市にある吉弘神社の秋の大祭（10月）や、吉弘氏直に関係する杵築市山香町の歴史まつり（11月）にも参加することができるようになった。

3 400年の時を超えた縁

振り返れば、昭和51年から55年までの4年間、博多で大学生活を過ごし、その間何度も太宰府天満宮や柳川の立花邸にも行った。しかし、当時は高橋紹運、立花宗茂のことは何も知らず、立花山にも岩屋城にも行かなかつた。鹿児島県出身の同級生の歌う「妙円寺詣り歌みょうえんじ」を聞きながら、楽しく杯を傾けていた。

私が歴史に興味を抱くようになったのは、50歳を過ぎた頃、大分県立図書館でふと目にした「吉弘楽がく」という無形文化財の案内パンフがきっかけだった。「吉弘」という文字に、亡くなった父方の祖母を思い出したからである。祖母は吉弘家の長女に生まれたが、吉弘の姓を継ぐ者がいないことを亡くなるまで憂えていた。

そういえば、就職活動を間近に控えた4年生の夏、経済学部の掲示板を見ていた私に「どこに就職するんね、良かったらうちの会社に来んね？」と声をかけてくれた方が熊本県の清田一族の方だった。清田さんは、その日偶然キャンパスに来たようで、それが縁で、同じ会社に入社することができた。入社後もお世話になり、研修先の信州上田でも清田さんの知り合いの方にお世話になった。

その後、私は本社に戻った。本社には、鹿児島出身で、先祖が代々島津家の家老を務めた方がいて、大分出身の私をとともかわいがってくれた。思うに、大友氏（立花氏）と島津氏は戦国時代は死力を尽くして戦った敵であったが、武士としての生き方を互いに認めており「昨日の敵は今日の友」みたいな友好関係を築いていたのではないだろうか。

九州大学経済学部には、九州や中国各地から多くの学生が集まっている。学生の出身地の歴史を紐解くと、数百年の時を超えた縁が浮かび上がってくる。偶然と思っていたことが、偶然以上のものであったりする。

私は今、九州大学経済学部同窓会の熊本支部の事務局長をしている。多くの方々との良縁を、これからも地域活性化の活動に生かしていきたいと考えている。

人物往来～退任

カリキュラム改革と 博士学位審査制度改革



経済学研究院教授

久野 国夫氏

[専門分野]産業技術

1977(昭和52)年博士入

私は1975年に北九州大学商学部経済学科を卒業した後、九州大学大学院経済学研究科に進学し修士・博士課程を経た後、4年間のオーバードクター（2年間の九大経済学部助手、および日本学術振興会の特別研究員を含む）をはさんで、1984年に鹿児島大学教養部に講師として職を得た。9年間の同大勤務ののち、1993年に九州大学経済学部経済工学科産業計画講座の助教授に着任し、その後学科の移動や大学院重点化による講座名称の変化などはあるが、1995年の教授昇任より九州大学経済学研究院教員として勤務し、2017年3月に定年退職した。教育や研究については記録をみれば分かるので、同窓会報では私が主導してすすめた標記2つの改革について、記録しておきたい。以前に執行部の一員として経済学部の何十年史かの編集にたずさわったことがあるが、その際に同窓会報の随想が大変役立った記憶があるからである。

ひとつは私が教務委員長として、2005年に主導したカリキュラム改革である。1993年に九大経済学部着任時のカリキュラムは以前と変わらない、学生は学部にあがると基本的に4単位の専門科目を選ぶというものであった。半期4単位であるから、週に2回の授業である。このカリキュラムはその後2単位に変更されたが、あまり落ち着かず短命のカリキュラムが何回か続いた。問題は2000年の大学院重点化時のカリキュラム改革であった。当時の執行部は何を思ったのか、「大学院重点化＝学部軽視」と理解したようで、学部科目を簡素化したカリキュラム改革を断行した。「断行」という表現を使ったのは、改革のやり方も乱暴ですべて教授会でおこなうとい

うもので、ひどいときは夕食休憩をはさんで夜中までの教授会で、全教員に意見を聴聞することもあった。

このカリキュラム改革により、私が当時いた産業システム講座では5科目、すなわち産業配置・産業政策・産業技術・サービス産業・労使関係があったが、学部での授業科目は「産業分析Ⅰ・Ⅱ」の2科目だけとなってしまった。したがって学部での担当授業科目は限られ、結果的に全学教育科目を担当するしかないということになった。この事情は他の講座でも同じであった。また入門科目がすべてマクロかミクロの経済学となり、それぞれの専門から今日の経済トピックを扱う「現代経済」はマクロ経済学入門に、「政治経済学入門」はミクロ経済学に内容変更された。このカリキュラムは学生の授業評価アンケートでも不評であり、上記した教員の担当科目の問題もあったので、2005年に教務委員会中心にワーキング・グループ（WG）を発足させ、カリキュラム改革を行うことにした。私はまず旧7帝大及び一橋と神戸のシラバスを取り寄せ、一つずつ勉強会を行った。その後基本原案を各学科等の会議に諮り、最終的に現在の基本科目と専門科目からなり、基本科目は2年生から階段をあげるように履修していくというものとなった。一番参考にしたのは名古屋大学のカリキュラムだったと記憶している。この現行カリキュラムはしたがって微修正はあるが10年以上続いており、以前の短命カリキュラム改革による学生の混乱（読み替え科目を参照しながら履修要件を調べる）はおさまった。

もう一つは2007年の評議員時代にとりくんだ、博士学位審査制度改革である。博士の学位は学校教育法や学位規則により、3分の2以上が出席し、その3分の2以上の賛成が得るという手続きまで定められている。当時の九大大学院経済学府では教授会で一つずつやっていたので、紹介や説明・質疑応答・投票など一連のプロセスだけで、何も問題がなくても30分はかかっていた。教授会の案内で議題に博士学位があると、教授会が長くなるなど覚悟したものである。そこでWGを発足させ改革することになったが、私は九大の他学府の学位関係の規則やもうしあわせを取り寄せ検討した。これでその年の私の夏

休みはすべてつぶれた。その中で私がこれだと思ったのは、工学府の「投票はおこなわず3分の2以上の賛成があったとみなす」という一文である。投票が一番時間がかかるからである。そうはいっても、

もちろん疑義がだされたら審議は行われるわけであるが、この改革により博士の学位審議は短縮され、学位授与数も増えた。多少は自負してもいいのではと思っている改革である。

九州経済と 立地企業に関する学習



経済学研究院教授

山本 健児氏

[専門分野]産業配置

この「九州大学経済学部同窓会報」第41号に着任の挨拶を書いてから10年強たちました。そこでは、第1に福岡にすぐになじむことができるだろうという見込み、第2に日本の諸地域で活躍する中小企業経営者にお話を伺う作業を続けたいという希望、第3にドイツの都市問題研究を手掛けているということを書きました。この3つのすべてを、当初の思い通りに進展させることができたかと自問するならば忸怩たるものがあります。しかし、第2点については、九州大学あればこそ、ある程度のことをやれたのではないかと考えています。

というのは、毎年、学生と一緒に各地で活躍する企業や公的機関を訪問し、指導的立場にある方々からお話を伺うとともに、工場等の見学も行なうという調査合宿を実行できたのは、ひとえに九州大学経済学部同窓生の方々が築いてこられた九州大学への人びとによる信頼があればこそ、と思うからです。

初年度は学部ゼミの学生がいなかったもので、大学院の授業に参加した学生たちと一緒に大川市の木工家具生産企業や組合を訪問しました。2年目には初めての学部ゼミ学生と一緒に北九州市のエコタウンや新日鉄八幡製鉄所などを訪問しました。いずれも現地での宿泊を伴いましたが1泊程度でした。3年目から3泊4日あるいは4泊5日に調査合宿期間を延長し、おおむね6～10の企業や公的機関を訪問しました。大分市と臼杵市（2008年度）、有田町・波佐見町・伊万里市の陶磁器産地（2009年度）、各県に立地する大手企業や先進的中小企業とこれを支援する公的機関（2010年度は熊本県、2011年度は鹿児島県、2012年度は長崎県、2013年度は宮崎県、2014年度は大分県北部、2015年度は長崎県北部）を

訪問しました。

2011年度以降、たまたま九州大学による「教育の質向上プログラム（EEP：Enhanced Education Program）」が実施され、これに経済学部・学府としての独自プログラムが認められたので、その一環として『ゼミ論集』の作成費用を補助していただき、企業や公的機関等の訪問で学生たちが学んだことを、学生自身の記録として印刷することができました。

学生たちが自ら企業や公的機関などとコンタクトを取り、移動時間なども考慮しながら調査合宿全体を企画実行できるようになることを期待し、それを勧めてきました。もちろん宿泊手配も含めて、です。訪問依頼状を学生たちに書かせ、それを添削して修正させるとともに、私からの依頼状も添えて、1か所2時間程度で企業・団体・公的機関の概要説明と質疑応答、工場等の見学を手紙でお願いしたところ、ほとんどが私たちの訪問を受け入れてくださいました。こうしたことを実行できたのは、学生たち自身の努力の故でもあります。やはり同窓生の皆様九州各地で活躍されており、九州大学学生たちのためならば、という気持ちを、たとえ九州大学と関わりをもっていない人たちであっても持っているからであろうと思います。感謝の気持ちで一杯です。おかげで私自身も多くのことを学ぶことができました。

他方で、ゼミ調査合宿を実行し、その記録を作成することは学生たちの成長につながったであろうと思っています。その経験を活かして、卒業論文を構想し、自ら調査を企画実行し、執筆することを期待しました。ほとんどの学生が期待に答えてくれましたが、力及ばず、という学生がいたことも否定できません。これはひとえに私の指導不足のせいです。

実は、学生と一緒にではなく、私自身の研究のために一人で、あるいは他大学教員と一緒に訪問した企業もかなりあります。数えてみたところ、学生たちと一緒にの訪問も含めて合計約130社に上りました。公的機関や組合などの団体も含めれば11年間で140から150箇所訪問したのではないかと思います。おかげさまで九州経済と経営者の方々「思い」を勉強することができました。今後、時間を見つけて、私なりの研究成果としてまとめたいと思っております。

経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。
本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

- 理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名
- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
 - 3 役員の内任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
 - 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。
(2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
(3) 理事については別に規定する。
(4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。
(5) 監事は本会の会計を監査する。
(6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

- 2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
- 3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 通常総会では次の事項を承認する。
 - (1) 予算および決算に関する事項
 - (2) 役員を選任、会則の制定および変更に関する事項
 - (3) その他本会の運営に関する事項
- 3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

- 2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。

なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- | | | |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 3分割 | 15,000円×3回（1.5年間で納入完了） |
| ③ | 6分割 | 7,500円×6回（3年間で納入完了） |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了） |

◎平成18年（2006年）3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成29年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がございましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。



九州大学経済学部同窓会事務局 （開室：平日の月・火・木・金 10時～17時）

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学経済学部内

TEL 092-642-2442 / FAX 092-642-2348 / E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。
 適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。